

後太平記 津國女夫池

近松門左衛門作

序詞笑を買ふ木のもと花已に老んたり。眉をえがく窓の前月猶残れり。優艶蘭唯の樂み君穩やかに民安く。國傳へます秋津御代正親町の院の御宇。足利十三代の武將左大臣從一位。征夷大將軍源の朝臣義輝公。龜尊氏公の箕裘を繼ぎ。國家の政道四惡を退け。洛陽二條室町に殿造り。オロシへ五美を奪み。給ひけり。地御臺所は大宮の大納言秋忠卿の御娘。去年の冬より御懷妊。既に永祿七年二月中旬。御着帶の御祝儀とて在京の諸大名我もくと出仕あり。御座の右は四職の棟梁。三好長慶入道が嫡子淡路守國長。左は管領淺川左京の太夫藤孝を先として。武衛京極品山仁木赤松吉良大館。其の外御譜代外様の客人迄。程につけつ居流れて。千歳を結ぶ腹帶の。行末永き例

ぞとフシ各。あつと拜謁あり。地御簾なかば卷上げさせ君御出まし。御盃を奉らんとせし所に。當番の奏者罷出で。御御舅君大宮の大納言秋忠卿勅使として。地御來臨と申上ぐれば三好國長御簾に向ひ。調不時の勅使如何なる御用も量り難し。大宮殿とは御内縁と申しながら。勅使御對面はいつもの通り。君も御座を下らせ給ひ。然るべしと申せども答へなし。地御簾を卷きあげ申すべきかと。いへども更に答なく御膝うごめくばかりなり。勅使は唯今と表よりの案内。三好せいてずんと立ち御濊つかんで引除くればこはいかに。義輝公はましまさず御舍弟御曹司義昭。立烏帽子に小直衣さながら武將の御出立。調ヤアは何ぢや。似せ將軍の化ぞこなひと。地御手を取つて

引きおろせば。藤孝始め伺候の人々。呆れて眉をぞ顰めける。地一つの檻を廣椽に昇据ゑさせ。勅使上座に着き給へば。左京の太夫藤孝謹んで。調義輝公は夜前より風邪の御所勞によつて。義昭名代として勅使を迎ひ奉ると。地首尾を繕ふ詞について。調恐れながら宣旨を奉じて。兄義輝に申し聞かせ候はんとぞ述べ給ふ。亞相勿取直し。此の度江州堅田の漁人。一身兩頭の龜を釣り得て朝廷に捧け奉る。古への伏羲氏の天下に王たる時。神龜龍馬出現せしより。唐土にも其の例多く。我が朝には元正天皇。聖武皇帝即位の年。又應永明應年中不思議の龜の出現以上六ヶ度。年號を靈龜神龜と改元迄ありしかど。地兩頭の出でたるは異國本朝其の例なし。菅家清家安倍土部の勘文。善惡の理分明ならず。武家の評議たるべしとの勅諭。龜を一覽し吉凶包ますフシ。勅答あれと述べ給へば。地藤孝立寄り檻を開けば實に誠。一體に二つの頭餌を爭ひ喰

ひ合ふ有様。命々鳥の類かや義昭を始め三好淺川横手を打ち。國公家の御沙汰に及ばぬ事不學短才の荒武士。地善惡の評定恐れありと難遊してこそ見えにけれ亞相重ねて。義輝公御所勞といひ即座のお請も輕し。地追つて勅答御保養疎略あるべからずと。座を立ち給へば中門迄オクリ敬ひへ送り參らせて。地御座に入らんとし給へば三好御手を取つて引据ゑ。國なう弟君。米は人の生命を養ふ寶なれども。薬は履草鞋となつて踏み躪らる。米と薬とは同根なれども。米の眞似ならぬが天地の定り。如何に御舍弟なればとて左大臣の装束着し。征夷大將軍の座に着き。諸大名に威を振ふは押出しての謀叛紛れなし。兩頭の龜の出現は兄弟天下を爭ひ。亂逆となる兆。地天照太神八幡宮の御告げ。其の胸にひつしと當つて拔指なるまひ。國家の大事忽にならず詮議の間國長が宿所に預る。サアお立ちと引立つる藤孝おさへて粗忽千萬。國先づ御親父長慶老にも相談。上意を伺ひ義昭公の御心底。一應も再應も尋ね問うて上の事のいはせもあへずア、あまいく。斯る大事の企問へばとて。ヲ、謀叛發すといふものあるべきか。昔九郎判官援越にて七枚起請を書かれても。頼朝許し給はず。地愚父長慶は正直一遍埒明かず。サアくお立ち但し繩をかけうかとひしめく所に。御乳母子海上太郎兼盛。端隱の遺戸蹴放し踊り出で。三好が髻烏帽子ともに引つ摺んでどうと投げのけ。殿中にて大口あき。身が殿を謀叛よ逆心よとは何を見付け。繩掛けんなどとはどの腕ぶしで。親長慶が賢人面の忠臣だて。義輝公のお腰を打ちぬき身が殿を煽たがる。親子の心に一物も二物もある以前の通りま一度吐かせ直に聞く。ヤ天下の大事己れ體にいふべきか罷立て。腮をこち明けても言はせて見せう。イヤ地はれぬとせり合ふ高聲。藤孝制して兩方鎮まれくと。いへども更に聞入れず。義昭公海上をはたと睨んで。喧し兼盛尾籠なり海上と押鎮め。國方々よく聞かれよ。不肖の義昭勿體なくも。君をまなび上段に坐し。諸士の歷々を欺きしを。謀叛と見たるは愚昧の眼には尤至極。折しも兩頭の龜出現して吉凶を示す事。兄弟天下を爭ふ瑞相といはん返答口を嚙むばかり。我誤りなき旨を云ひ開けば。兄の恥辱を諸大名に觸れ聞かするに同じ。地所詮一生兄弟面を合せじと。思ひ定むるばかりぞと指添抜いて角額みどりの御髪ふつつと切つて投げ給へば。海上太郎も藤孝もフシ動順。詞はなかりけり。地義昭座を打つて。國エ、あさましや兄義輝公。天魔の魅入りか九條の遊女町へ。忍びくの御遊山と聞きしに違はず。一昨日より御出で。今日の御御臺所より人橋を掛けらるれども。醉臥して御正氣も無しとの便り。はや方々は出仕。奥には敗亡詮方なく。御臺所と相談にて此の扮装。サア御恥をいひ散らし一時も御殿に足

は止められず。地藤孝斯くておはすれば天下の政事に氣遣ひなし。我は是より三界坊ヤイ海上。同共に發心お供などとしてびくしやくせば。今生後生の勘當。藤孝に従ひ忠節を忘るゝなど。地つつと寄つて龜の片首すつばと切り。サア此の上は争ふべき者もなく。天下太平御代萬歳の瑞相と勅答せよ。葵菴の葵紙の金一鉢の設より。外を求めぬ身なれども此の龜は申し請け。同池に放ち成佛の縁を結ばんと。地既に出境とし給ふ所へ。問註所の方よりなう若君申し／＼と。父修理の入道長慶御所に平伏し涙を浮め。同我等疾く出仕せば御髪は切らせまじ。曲もない藤孝殿海上太郎。縋りついてもなぜ止めましてくれませぬ。不忠無禮の件ゆゑ六十に餘る入道が。數年の忠義も無になつたか。何を以て我等が心底御目にかけん。地是へ參れ國長はつと答へて父が前。下ぐる頭を抜打ちに。フシ水もたまらず打落し。同是でお腹をいられ各も疑ひ晴

れてたべと。地髻を掴んで差上ぐる義昭振返り。同ム、長慶。これは其の方料間違ひ。國長整に當つて切る髪にあらず。所存あつての發心よし面うちに切る程なれば。數ならねども日本の大將軍。義輝公の弟源の義昭が。髪の毛一筋には親子が首を並べても替へはせぬ。地汝に取らする跡弔へと見返りもせず立出でて。直に又入る法の道。聖の道も國民の治まる。道ぞ三思ふこと。フシ御生の注連に。引く鈴の。叶はずばよもならじとの頼みを賀茂の瑞垣に。玉依姬の其の昔別雷の御神を。御産の紐のやすらかに。スエテあやかる爲の御祈り。二月の空のフシ暖かに。日和義輝將軍の御臺所の神詣で。御伽は君のお手かけの梅枝白菊初雪を。妬み憎みも女子氣の。きどく帽子に顔を。つゝみ何れをそれと餘處目には。人の見知りも。ノシ風吹く。柳が枝ともつれ合ひ徒歩おひろひもお身ごなし。外珍らしくともすれば行き休らひて道草を。地摘めど何れを何れともなさへ知らじな萌え出づる。草の色々問ひ問はれ。摘む春草のなに／＼ぞ。御行繁葉。佛座。菰蘿菊。芹薺。世に災難も七種は。此の初春に。フシ摘み捨てゝ。野邊の千草の色見草歌人の家のことぐさは。千々の心を種として。萬の言の葉も茂り。又色好みの戀草は。忍ぶ夜すがら月見草とみにも人を夢見草。いとし人とし片敷けば。草の枕も綾や錦か。金襴緞子の夜着も布圍もな。なん／＼なつこりや入らぬ／＼。締めて寢た夜の。フシ其の明けの日は。いと思ひのまさり草。誰か嫌棄の寢よけにて朝置く。露の消え残り。濡れた姿の妬まじや。我に摘めとて此の草の人に心を。フシつく／＼し。茅花亂れて御生野のシテ櫻はまだし。ワキ梅かをる。シテ花にあこがれ草にめで二入フシ宿をかすみの儘ならば。明日も明後日もまとゐして摘まゝ。ほしさに行きかねて。フシしばし。やすらひ給ひける。地景好き所に御座を設け御臺所をお迎ひに。

清瀧といふ女會釋こほして。調是はまあ

くどなたをどなたと申す中にも御臺様。

地御所でさへ土は踏ませませぬ御養生なれ

ばこそ。お幕の内でもとお休みといひけれ

ば。御臺御機嫌うるはしく自らが面白さに

人もさこそと思ひやる。調御所の歸りは夜

をこめて。皆おじややいのと引連れて、フシ

幕の内へぞ入り給ふ。地御遊も半ばに末の

女お幕の外に畏り。調淺川左京の太夫藤孝

殿の御使者。冷泉造酒之進と申す人。地御

取次の女中頼み度きとの御事と案内す。清

瀧斯くと申し上げれば聞いたく。調藤孝

の使者とは今日神詣の見舞ならめ。そち取

次いで其の使者の口上も聞かうし。地いひ

たい事も話さうし皆見ぬ顔と宣へば。女中

同志はさばくと。今日の果報は清瀧殿遊

山はさつしやる戀しい男の顔は見さしや

る。見ぬふりしたら何さしやろも。ヲ、う

らやましとフシ咬けば。清瀧も氣を上げて。

調口のわるい嗜ましやんせ。造酒之進殿と

は御臺様の御指圖で。末々夫婦の筈なれど

さういはれてはどうも行かれぬ。地といふ

は嘘逢ひたいが眞ぢやもの。是が行かずに

居られうか。少しの痴話は御免なりませ皆

様と。怯めず臆せず立ち出づればどうする

事ぞと女中達。フシ幕の物見に縋り寄る。

地冷泉造酒之進房平。淺川様の繼上下。鹹

造りの長刀。さすが育ちも小姓上り年は二十

の上越して。一つ二つ三つ指にて。草に手を

つき頭を下け。落付く程清瀧は戀にせかる

る早瀬川。心たぎつて詞に餘り。調御臺様

神詣。お悦の使者ならば取り繕うて申すべ

し。地其の手間に此の頃の積る話が聞きた

いと。手を取ればもぎ放し。調急の御使馬

を飛ばせ。其方の濡より此の方の背中の中。

大汗を絞る仕合。主人藤孝申し越し候は。

御臺様にも御聞き及び。義輝公御寵愛の傾

城大淀と申す女。三好入道が九條の町を請

出し則ち彼が娘にして。今暮御所へ入る筈

に相極る。入道がかねの仕業。倅國長

が首を討つたるなど。君に心を許させん手

段とは。藤孝見付け候へども是ぞと申す越

度なければ是非を糺す迄もなく。地御諫め

申せば。却つて入道を猜み妬みの讒言と御

立腹。調此の度傾城を御所へ入れては御家

の滅亡遠からず。是を止むる事御臺様の力

ならでは叶ひがたし。地片時も早く御所へ

お歸り。お供申せと主人が口上。此の旨御

披露願ひ入ると述べければ。エ。調是は又

餘り興がる。地お側から腰押してもさうは

させじといふ内に。御臺幕より立出で給ひ。

調なう冷泉。使の趣かしこにて聞きたるぞ

や。藤孝の知らせ然る事なれども。諸侯に

八人の思ひ妻はある習ひ。御所へ入れずば

妬み憎氣と。地其の傾城の賤しき身に蔑ま

れんも恥かし。君さへ御心慰まば大淀に

は限るまじと。歸つて申せ造酒之進と露も

御氣に止めぬ風情。調梅が枝さし出てこれ

申し御臺様。かう並んだ三人は皆殿様の手

かけの身。憎氣なされぬを悪いと申せば身

にいひかぶる様なれど。殿様より御臺様百倍のお情。我々も御臺様と奉つて。お詞を何が背きいはいではなけれども。傾城はぞんざいの凝り。近い證據は帶の祝ひの折からも。殿様を留めて戻さず。義昭様の御出家も皆其の傾城づらめから。九條に居る内さへあれちやもの。御所へ入れたらほんに／＼のさばり返つて手に入れ自慢。御臺様が不運と地萬事を鼻であしらは。十度に一度はお腹も立たいで何とせう。其の時お悔みなされても俄に愠氣もなるまいし。追ひださうにも動くまいしお修羅の種を見る様な。白菊様初雪様。清瀧殿さうぢやあるまいかと。君を思ふも、フシ身を思ふ。地詞の内より御臺所焚付けられて燃ゆる火の。胸にあまれば色に出でお顔もあけの目に涙。いやればさうぢや入れては大事。供せよ冷泉皆もこい。ソリヤお歸りよお乗物。奥よ車とひしめいて。賀茂の御手洗川瀬の波。およぎ着く程氣もせかれ道を早めて三

立歸る。海上太郎兼盛。乳兄弟の主君義昭公。御發心の供には具せられず。生中御所の奉公三好などが下に付き。外儀並に追廻されんも口惜し。舞さればとて仁王の片方立てた様に。獨り脇を張つても濟まず。所詮義昭公の御行方。地尋ねんと思立ちけるが。君も御先祖代々我も親代々。相傳の主君の御殿。せめて御門より御暇乞の御禮と。近衛通を室町の御所の御門を見渡せば。扉八文字に開き。式臺には高麗臺星の如く歌の御會か御振舞か。何下やらんと門番の下役に仔細を問へば。今夜は悉くも新御臺様のお輿入れ。町々の辻固め。館の内は式三献の御用意。赤飯蒸すやら餅搗くやら。餡かくやら庭掃くやら。地フシませますとぞ語りける。同じして新御臺とはどなたの姫君。ハテ隠れもない九條の町の傾城様。大淀様と申す太夫。三好長慶様の娘分になされて。あれ／＼提灯が見える。道の警固は岩成主税殿。サアかたづいて踞う

たく。地立ちはだかつて鐵棒頂戴なさるなど。フシい捨て内にぞ入りにける。地元より堪へぬ海上太郎。圓いかに吐り手なければとて。幅の廣い傾城の請け様。新御臺とははたへ過ぎた女め。大事の主を坊主にし。うま／＼と御所へ入れては無念の無念。地主人の髪切らせた代り。其の女め素頭はり掻いてくれんすと夕闇に。振亂す大響。重代の金剛兵衛四尺八寸。鐙元くつろけ廣たへしは。反橋の欄干を、フシ腰に差いたる如くなり。地時も移らず三條坊門の四辻。提灯つらなる行装は。さながら姫宮政所の。御輿入ともいひつべく。興添は三好が執權。岩成主税助重正。御弓頭馬淵團八郎友澄。徒士若黨迄子持筋の袴の町々。隅々に、フシ眼を配つて歩み來る。先に手を振る徒侍。はつた／＼と左右へ蹴飛ばし。走りかゝつて乗物の棒端。ぐつとひつ掴み大音上げ。室町殿の御所が揚屋になり。傾城を請込むと今聞いた。扱々仰山な揚屋

入り。大淀には我も執心。買はうくんと存じた所。今宵は身が貰ひ申す。金銀としては持たねども。是見よ四尺八寸亂れ焼の刃金を持つて。脇はなはともに請出す。地サア引きおろし道中させて見物せん。こりやくくと四五間取つて突き戻せば。奥も人も一くるめ大地にどうく。フシどうと轉ころび重かさなり。地岩成馬淵命知らずの狼藉者と。左右より取付く所を寄せも付けず蹴散らし。飛びかゝて奥の戸はたと蹴破れば。思ひもよらぬ義輝公。跡に續いて大淀が。生きたる心も泣き沈み。御袖にすがり立ち出づれば。さしもの海上。ハア、是は存じ寄りもなやと。スエテ土にくひ付くばかりなり。地武將はつたと睨ませ給ひ。同悴め推参千萬。幼少より義昭が膝元にて育ちし故。萬事宥免して差置けば。程を知らぬ我儘。我が奥に向つて狼藉などとは。勅諭にも叶はず。地但し義昭がいひ付けたるか。フシ御氣色。變つて上意ある。同ハア是は恐れな

がら上意とも存ぜず。海上狂氣も仕らず。我が君と見らば何の慮外致すべき。天下の主源の義輝公と申す大將軍。傾城の相與に召さんとは。いかな曉の夢にも思ひかけなく此の仕合せ。君はあの賣婦奴ゆゑ九條の町に夜あかし日あかし。地それ故弟君の御通世。御臺所のお歎き。御所中そはくしく諸武士上を輕しめ。恐れねばおのづから御威勢衰へ。國家の大事となる事。鼻の先にぶらつけども。諫言申す人は七里けんばい。毛鎗頭の長慶狸大淀狐。どれぞ一疋踏み殺さんと存じての狼藉。我等が殿に通世させた替り。あの賣婦髪はなはの毛引抜きすんほろほうに仕ると。諸人の輕薄裸けいはくにして。フシ齒に衣着せずぞ申しける。スエテ大淀もおろく涙。同道々申すも爰の事。御臺様への憚り。外に數多。お手かけ衆。いかな賢女も嬉しかるまじ。外の誹りは御名の恥。御所の中へはわしやいやく。地是から戻して下さんせ。歩行で往にますさらばやと。立たんとすれば待てく。同推参な小丁稚。攝政關白も冠下けらるゝ此の義輝。國家の政道汝に教へらるべきか。餘人の見せしめ。地岩成馬淵彼奴撲てく。承ると兩方より。杖振上ぐれば睨みつけられぢつと引く。振上ぐれば睨めつけ。睨めつくれば棒を引く。同身がいひ付くる何とく。地上意なりと聲をかけ。續け打ちに二三十。胴骨腰骨目鼻もわかつ。めつた打ち。散々に撲つて撲ち伏せたり。同エ、あつたら奥をさませし。大淀はへ。地いざ祝言の盃と。フシ手を引き御門に入り給へば。地岩成馬淵下部迄。同ア、よい態。一人物に狂はせよと。地御門の門はたとさす音笑ふ音。奥は千秋萬歳の。諸千箱の玉とぞ諺ひける。同海上御門をくわつと睨み。百萬の理を持ちながら。蠅同然の奴輩に撲たれたる口惜しや。雷が落ちかゝつてもびつくとと思はぬ海上が。地上意と聲をかけられて。思はず頭がさがりし。は扱も天下の御威勢は。斯程にも重かりし。

上下の違ひ是非もなやと。手鞠の様なろ
涙をはら／＼とぞ。流しける。地見廻
す築地の彼方より。此方にさしたる櫻の枝
を。登り傳ひてさゝがにのいとあぶなけに
女業。取付く梢も花の香の。堀も小濠もか
かりつ破れつ。下に見るとも白綾のひとへ
帯。梢にかけて兩の端。手に取り絡み一思
ひ。ついと飛んだる一はづみ。オクリひらり
と。こそは。フシ落付きけれ。地海上すかさ
ず走り寄り。同心許なさ。何者なりと咎
むる聲。ア、高い高いさういふは海上太郎
か。我こそ御臺と聞きもあへず。ヤア、
御懷胎の大事の御身。夜中にお一人此の樹
を傳うてあるまい事。御龜相至極と申しあ
ぐれば。なう龜相とは。フシ曲もない。地
大淀といふ女ゆゑ。日頃お手かけ茶梅枝初
雪白菊などが。腹立つるをも様々なだめ押
へる程の自らなれど。今夜の體を見ては半
睡も御所には堪られず。御守刀を咽喉へ差
當て見たれども。我一人の身ならねば。死に

もやらず何の當所もなう拔出で。實家へ歸
るも猶口惜し。地何處をどうとの知べさへ心
に任せぬ身の上を。哀れと思へ海上と。フシ
涙にむせび入り給ふ。地御道理／＼よい折
からに参り合せし。何方へも御供。御心安
かれと申し上ぐればいやく。人に誘は
れてなんと。ない名を立てられ猶無念と宣
ふ間に。地御所中騒ぎ御臺様が見えぬわ。
御臺様／＼と。女の泣聲上下の騒動。築地
の外を探せ／＼と呼ばはる聲々。南無三寶
と御臺所。フシ行方も知らず落ち給ふ。
程なく御門さつと開き岩成主税。中間足輕
四五十人。棒提け走り出で。圓こりやく
海上めまだけつかる。御臺様の方人は彼奴
め。お行方ぬかせと取廻す。ハア、知つた
とていふものか。地うまい奴等と片はしに。
蹴散らし／＼岩成が陶ぐらをしつかと取
り。圓うぬは能う上意ごかしに撲つたなア。
早速ながら返禮と。地礫と蹴返し打ちのめ
し。頭も碎け腹も裂けよと踏付け／＼。圓
ヤイ手引してうぬが主の長慶に一目逢はす
るか。然らば助くるさなくば只今踏殺す。
何と／＼。ア、／＼命お助け下されば。主
人長慶に逢はせましょ。しかとさうか。誓
文誓文待其利。詞サア案内と引立てられ。
飛びしさつて大聲上げ。圓主人長慶に逢ひ
たくば當年はならぬ。来る灰のえ猫の年。
十六月朔日の。三つある時逢はせうと。地
云ひ捨てどつと駈入つて。フシ門の戸はた
と打つたりけり。エ憎くい髭め。地よし／＼
長うは生けぬ奴。いで海上も御祝言の祝ひ
の石を参らせんと。大下馬の道具止。四尺
四面の立石。あいやつと引き起し。高く差
上げ力に任せ。あいやうんと投付くれば。
四方四維に地響きして。ほつかり打抜く概
の扉。フシ石火矢なんともいひつべし。地
いよく騒ぐ御所の中。馬淵團八郎扉の破
れに首差出し。詞冥加知らず命知らず。作
法知らずの暴れ者。はや立去れと呼ばはる
頭ひつ掴み。地あいやと引けば團八も。ヨ

ハリ身を遁れんと前へ引き。互にゐいやと引く拍子。咽喉のかけがね首の骨。がつくり折れて皮ばかり。ナホス二三尺引伸し。一ねち捻てふつと切り。近頃乏少輕微ながら。是今晚の進上と。館の前にかつばと投棄て。夜も更け星も流るゝ御溝の水は南。我は北へと行く月も。西に入りくる東がしらむ。五更の一天鳥もはらく鐘も鳴る。數は六つの巷の聲々。又立寄つて門の戸を。うつゝか夢かあけやらぬ恨みを。殘して歸りけり。

第 二

地君が代につくともつきじ米麥の。都に通ふ鳥羽巖其の片里の七瀬川。やせたる馬の飼料とて淺川左京之太夫藤孝。三好修理之太夫入道長慶に賜つたる。秣刈場の領界。境目の樟木真中に。轉び伏したる女の死骸。頭は淺川足は三好の領分と。兩屋敷へ訴へ雙方の庄屋月行事。村のあるきは棒突き並べ。詞まあ一二尺東へ寄るか一二尺西へ

行き過ぎるか。どちらへなりとも片付かで。地中有に迷ふ女の死骸。フシ未來もさぞと呟きける。地檢使のお出でと先走りフシ各。土に平伏して。待つ間ほどなく淺川の大いん冷泉造酒之進。三好が執權松永彈正久秀。クリ供人。引具し。フシ死骸の前後に。挾箱立てさせ。淺川三好境目の論。落着いかにと手下の者。フシ固唾を。呑んで控へける。なう冷泉殿。所の者ども呼出して仔細お尋ねなされまいか。貴殿御聞きなさるれば拙者も共に承る。御挨拶に及ばすいざ。地然らば御免と松永彈正。淺川殿三好殿兩方の庄屋出ませい。詞さて始めて見付けしは何者。其の節外に怪しき事はなかりしか。殘さず申せ死骸檢分の上。相違あれば汝等。屹度曲事なりとありければ。庄屋罷立ち。見付けし人は三好長慶様御領の百姓則ち是なる木六兵衛。地其の見た通り眞直に申し上けよと突出され。詞我等井出の水落しに。今朝とう出かけにふつと見付け。世間は暗

し小氣味はわろし。何見届くる迄もなく其の儘逃けて歸り足。庄屋殿へ注進しそれから村中駈着けて。淺川様の御領へも人を走らせ。お屋敷へも付届け兩庄屋出合の上。地死骸に菰を着せたばかり外には何も存ぜずと。いひ分の趣。兩家の若黨矢立取出し口上書。フシ一々記し留めけにける。地いざ檢分と兩人死骸に立ちかゝり。撥除くる菰の下様ならぬ女の風情。面の皮剥ぎむくればたとへ存じの者なりとも。面色たれてそれぞとは。誰が目白き練の下着。上は地なしに素縫の袴。身内に兎の毛で突傷も。切傷とてもあら不便や。懷胎の女ごさめれ臨月近き錦の腹帯。しめ殺せしに極つたり。詞造酒之進殿御覽なれ。此の女町人百姓の妻にあらず。公家武家も國主方の御簾中。剥ぐべき衣服は其の儘に。面の皮剥いだるは追剥盜賊の業でなく。金水引のさけ下地。髪も亂れず死姿繕ひしは。殺して捨てたるに紛ひなし。地迂濶に取置く死骸でなし

さうは思ひ召さぬか。調實に／＼尤の氣の付き様。袖小袖の縫は將軍の御物好。俗にいふ室町模様。下々の着る小袖にあらずと。いはせも果てずこれ／＼造酒殿。其の將軍で思ひ當る。御所を夜ぬけに行方知れぬ。御臺所も懷胎此の女も懷胎。髪のかゝり衣のあや凡人ならぬ所あり。其の御方ではあるまいかと。言へばさうかと差寄つて又改むる屍の。顔にぞ人の見知りもあり。肝腎の面知れざれば何をどうとのあてもなく。二人ははつと差俯向き。ッあぐみ果てたるばかりなり。地やあつて松永彈正。調貴人高家の腹帯には。懷妊の月日姓名を記し。變成男子御産平安の守を納むる習ひと聞く。此の死骸にもあらば證據の第一と立寄つて。疑ひ解く錦の腹帯。内に籠めたる五大明王。六觀音七佛樂師の御産の守。願主征夷大將軍源朝臣義輝と記されたり。調是々疑ふ所もなく御臺所に極つたり。國家の騒ぎ天下の憂ひ何者の所業か。地果敢

なき御尊骸の有様やと。涙を噤つて立ちつ居つ騒げば共に騒がれて。驚きながら造酒之進。見れば見る程手足の不束。腹帯の印は兎もあれ御臺所に似ても付かず。松永が顛倒仔細ありと心に領き。御臺所と分明に知るゝ上は。片時も猶豫なり難し。三好殿御領内の騒動。氣の毒ながら淺川が存すべき旨趣もなし。立歸つて言上せん家來参れと駈出づれば。なう／＼暫しと走り寄つて引戻し。淺川の難儀三好に塗付け。歸るとて歸さうか。棒木より西東淺川の領内に。死骸が大分かゝつてあるとは一目見ても知るゝ事。御身が眼にかゝらぬか。ヤイ雙方の百姓ども棒木を分けて兩方へ。死骸のかゝりの尺を打て。地承つて立ち掛り棒木の中より東西に。引く繩筋の歪みなぎ代代の掟の墨かねも。西の方淺川領に死骸のかゝり。調一尺二尺三尺一す五分。東へ三好の御領には一尺一二三三寸はござりませぬ。兩庄屋立合見届け。地一分も違ひ候はずと申し上ぐればあれ期かれよ造酒之進。淺川領へは一尺八寸の上行き過ぎ。殊更に頭の方。一足ゆけば三好の領は離る。大を捨て小に付く法やある。御尊骸も取納め。御敵の詮議仕らうと出直さねば。淺川の爲も悪しからんと。地主の威光のはねばかま驚にかゝつて着せかくれば。淺川の民百姓すは我が地頭の敗なるわ。村の造作と呟きける。地造酒之進から／＼と打笑ひ。調いやさ五尺三尺此方の領へかゝればとて。死骸の踏んだる足の下。三好殿の領内なれば淺川が知るべき様なし。疑はしくば百姓ども。其の死骸の足動かせず引越してお目にかかけよ。地はつと人より我先に三好方の百姓ども。死骸の足をしつかと抑へ手ん手にすつと引起せば。踏んだる足は三好が領内御覽なされ松永殿。此方の領分には些少の構ひなし。御尊骸も取納め御敵の詮議御肝要。此の旨言上仕る。言分はござらぬか。調何と／＼と迫りかくれど松

永一句の理に詰められ。返す詞も投首し、誤り入つたる風情なり。死骸を抱へし百姓どもどうやらかうやら敗けになつた。あつた面倒な死人やと。放せば東にかつぱと倒れ。いよく西に障り無き忠と不忠と善悪は。人間世の境間にて。是を分つは天道の直なる道を立別れ脱んで。左右へぞ三三〇〇別れける。フシ黄金の臺。玉の床。錦の褥に夜もすがら。歌さまと添寝の。夢を見た。覺めて悔しと一筋に。牛馬ヲシ調子合せて三つの緒の。フシ餘所にはかりの。泡沫を。爰にはちきに起臥して。夏冬知らぬ室町の。ナホス御所ぞ榮華の。フシ奥御殿。女中ばかりで濱松の音もねほれし大騒ぎ。障子隔て、次の間に連三味線の手もたゆく。本歌投節流行歌。彈いては歌ひ歌うては。聲も枯野の朝霜や。フシ興の興をぞ催しける。俄に酒宴の座も静まり。義輝公の御聲高く。昨日迄は傾城の大淀。今日は我が御臺所何事が氣に入らぬ。地ヤレ皆寄つて機嫌と

れと廻らぬ舌を廻り聲。障子の外にも息をつめ内を窺ふ折節に。堀中門の車戸ぐわらくくと明け。走出づるは表使の清瀧殿是なうく。忙がしけに何事ぞア、氣遣と尋ねれば。園梅が枝様初雪様。お二人ながらお伽の役か聞かしやんせ。又お傾城様の機嫌が損ね。今朝からけがな莞爾ともせず。それ故例の機嫌直しの御成敗が又始まります。私が親の岩成主税之介に。其の切殺す人連れて来いとの呼使。地こんなお使するも因果。お役藏る親の身も因果。御登様の敢ない死を遊ばし。其の詮議も済まぬ中是が先づある事か。氣も進まぬ歌うたひ三味線彈き。お伽もむやくじからうが。辛棒が大事傾城殿に脱まれて。憂事見せて下さんなとフシ語り捨てゝぞ走り行く。聞いて二人は身慄ひし。なう梅が枝様。毎日々々むごい怖い哀れな事。見聞くではないかいな。昨日切らるるは誰でござんしよの。ア、昨夕から白菊様が見えぬぞや。地但し奴ど

もか馬取か誰にもせよといし事。ヤ面々に命が大事。氣に違はぬ様にいざ役目の三味線と。餘所の哀れを身の上に。思ひ調べの糸よりも心は二上り三下り。撥もしどろに弾きなせり。ワイモン昨日は人の身の上の。今日は我が身の。あすか川。罪なき。罪に沈み行く。水の哀れや。ヨサイ。ヨ。ヨサイサヨ白菊か。何を。科とてかゝるべき。覺えも繩にからまれて。ナホス引出さる、フシ御所の庭。後に岩成主税之介邪見の眼四方に配り。切つてくれんす面魂見るより二人は撥投げ捨て。庭に飛びおりなういとしや。又人を切ると聞きしがこな様かいの。かう三人は昨日まで高下もない御寵愛。如何に見かへらるゝとて。慰みに人殺すとはあんまり酷い情ない。此の世の暇乞ちやぞや。白菊様なぜに物いはしやんせぬ。地や猿轡が箆めてあるわいの。エ、胸慾な鬼神。御臺様も定めて殺し手は外にあるまい。あれを聞き是を聞くに付け。此

の二人が當り番近付きましたと縋り付き。

くどき駄ければ白菊も。物いひたげに身をあせり。涙を今の暇乞ひ。三人顔を差寄せて泣き沈む。フシこそ道理なれ。岩成主税二人を引き除け。隣入つては大淀御前の御機嫌如何。お手前達も今の中随分口たゞけ。

追付け狼轡に間もあるまいと。惡口明けて塀中門。フシはたと引きたて入りにける。なう初雪様。地獄々と來世の様に思ひしが。大淀は鬼の大將あの門の彼方が無間地獄。馴染の白菊殿。最期を覗いていざ回向とおづ／＼覗く門の隙間。梅が枝様あれ見さんせ。白菊様を引据ゑて。縄を解くは助くるか。いや／＼兩の手を引張つた。主税之介が後へ廻る何とするぞと見る内に。どうと響く太刀音。なう悲しや。兩の手を切り落した。痞が胸へ差込んで私や動かれぬ。ア、南無阿彌陀佛と。フシそろに慄ひわな／＼けり。アレ初雪様。今のを見て大淀めが笑ひくさる。アレ殿様へ抱付

いたと告ぐる内。重ねてどうと響く太刀音。梅が枝様今のは何ぞ。いとしや首がとばかりにて。スエチ身を投伏して泣きまたり。

梅が枝吐息をつく／＼と。思案をすゑてコレ申し。昔唐土に討王といふ大王の后。姐己といふ美人人を殺す事をすき好み。地の晨月の夕酒宴の上に。多くの人を切り

さいなみ。民の歎きも願す。忽ち國を失ひしと語に聞きしを目の前に。大淀は其の姐己に勝りこそすれ劣りはせじ。遂には私等も白菊殿同然に。殺さるゝを待たうよりいづそ走つて退けまいか。いや斯うかいのと噓く後の御寢所に。何時の間にかは義輝公。大淀諸共ましましてお耳に入るとも知らばこそ。誰かある人は無きかと召さるゝ聲。二人もはつと敗亡し。逃けもやらず。フシ居もやらず消えも入りたき風情なり。岩成是にと罷出る。二人の女成敗して。大淀が機嫌直させよと。地御意より早く飛びかかり抜き打ちに初雪が。右の肩先はらりす

んと切り下げたり。梅が枝しさつて身構へし。工殿。千萬無量の云ふ事もたつた一字に止まつた。今の恨みが何處へ行かう。

ヤイ人喰ひの鬼女よ蛇よ。生き替り死に替うかいな。地人に魂魄がある物かない物か。思ひ知れやと恨みの齒ぎし。涙一滴眼に浮めず。睨み詰めたる眼ざし。サア寄つて討て岩成と。首差伸ぶれば主税之介こは

ごはそつと立寄つて。太刀振上ぐれば敢なくも。フシ首は前へぞ落ちにける。大淀見てか面白いの。あはれ何處にも謀叛人が起れかし。そまじを連れて討手に向ひ。千も二千も引き並べて成敗の見飽させたい。酒も過ぎたちよと寢よか。主税死骸を片付けて休め／＼と宜ふ所へ。お取次の侍罷出で。いつぞや烏羽の七瀬川にて。御臺様を殺したる科人を。三好長慶召取り申されしが。只今御詮議なされんや。伺ひませとの御事と申上ぐれば。君大きに御喜喜あ

り嬉しゝゝ。舅大納言より姫返せ御臺返せと。毎日の難題に困る所よくしたりな。

大方の詮議ならず長慶入道左京太夫。藤孝兩職立合ひ屹度事を糺すべし。我も直に聞くべきぞ囚人牽かせと。御説の趣相傳へ。兩人御前に詰めければ。松永彈正囚人護り御白洲にぞ引かせける。三十許りに小柄の男惡びれぬ面付。長慶ねめ付け。汝勿體なくも御臺所に對し牽り遺恨あるべき様なし。誰に頼まれ。何故に失ひ參らせし眞直に申せ。少しも争は。矢柄實鐵砲拉ぎ。言はせて見せんと。幽にかゝれば。囚人御前を遙かに見やり。ハゝゝゝ、お久しやコレ段。昔は君が打つ露に命を繋ぎし蟋蟀の佐傳。今見ぬ振はお情ない。太鼓持こそ致せ命は金で賣つた物。寸々に刻まれても申さぬ。お氣遣ひ遊ばすな。其處等は立派に立つる奴と。名さゝねばかりに君を見る眼ざし。御立腹の御氣色。並居る警固伺候の人々。フシ手に汗握るばかりなり。長慶聲

をかけ知れた。仇口きかすな松永、それ引立て首を刎ねよと下知をなす。藤孝押へていやく。何故の恨誰に頼まれ害せしと。明らかに白狀もさせず。理不盡に首を刎ねては詮議暗し長慶老。ハテ物に馴れぬ不功なり藤孝。只今の詞に頼人は知れた。そんじやうそれと名をさして白狀せば。却つて君の御難儀と分別し態と名を聞き切らず。但し跡のつまりぬ時御邊見事捌くか。ヲ、跡は藤孝が捌く。ヤイ囚人。謎掛ける様に吐かさすとも眞直に申せ。忝くも武將の御前。長慶藤孝が詮議。眼を開けとありければ顔ふり上げ。跡の御難儀構はぬとあるからは舊紙を破つていうて退けう。頼人はあの殿様。御臺を殺し大淀御臺に定まらば。一廉大名に取立てる契約の印と。大判五十枚戴く是が證據と。地手を放したる白狀君甚だせかせ給ひ。御牙を嚙みならしスエテ御身も頼ひ見えければ。藤孝んと藤孝申さぬか。跡がつまりぬとは此の

事。是非に及ばず御舅大納言殿へ誤り詮議。御隱居の御思案。それ松永首を討てとせり立つれば。藤孝重ねて待て。惜い嘔吐め。同類の張本あり證據を以て詮議せん。造酒之進參れと高らかに呼ばはり給へば。記録所の方より冷泉造酒之進乗物昇かせ走り出で。緣先に昇据ゑさせ。御詮議の元是に候と御乗物の戸を開けば。お腹にやゝをもち月の山の端出づる其の風情。伺候の諸武士恠り顔義輝公も御怪轉顔。入道が遊び顔御臺所の御顔は。上氣こうじて紫の藤孝の側を去りやらず。スエサし俯向いて坐し給ふ。豫て謀し置きたりけん松永彈正つつ立ち。囚人の首水もたまらず打落す。藤孝大きに苛つて。ヤレ詮議の残る大事の囚人愈忽の成敗。長慶御邊がいひ付けかと。問詰めてもちつとも騒がす。御前に向ひ涙をはらゝと流し。申し上ぐれば入道が人を猜む讒言に似たり。申さねば不忠是非に迷ひ候へども。天下の爲君の爲に

は。嫡子國長が首討つ程の長慶が。僞事とはよも思召されまじ。情なや御臺所に心を通はす。密通の男おびき出し隠し置いたりと承り。手段を以て乞食の孕女をもとめ。殺手をこしらへ斯の如く計ひしかば。地忽ち御臺所の御在所顯れしは。某が思ふ壺にあたる所。却つて罪を長慶に塗らんとする佞臣逆臣。理非問召しわけられ長慶越度に極まらば。二言ともなく御前にて切腹と。刀の柄に手をかくれば。ア、早まるな入道。汝に些か誤りなし。善人悪人は我が兩眼に見分けたりと。御佩刀するりと抜き。不義の女不忠の男まつ此の如く打つて見せんと。御座の疊を背打にたゝみかけて七つ八つ。はたぐと打付け。ハア、心地よし長慶。汝に未だ寢間を見せず。一獻酌んで氣を晴らさん。サア來れと召連れられ。簾中深く入り給ふはッシにがく。しくも笑止なり。地御臺御氣も亂るゝばかり。エ、口惜しや我も大納言の娘。腹立ちや不義とい

はるゝ此の無念。よし死なば死ね無責任うては死ぬまじものと。駈入らんとし給ふを。ア、御尤さりながら。酒色に溺れし我が君御心蕩けし上は。理を申す程非に落つる。萬端藤孝に御任せ。これ造酒之進。汝と清瀧夫婦の約束あると聞く。地然れば飽略あるまじ。清瀧が局に御臺を忍ばせ随分守護し參らせよ。承ると對の屋のッ馬道を忍び入りにけり。サア惡入道が退出を待受け。手をすらせんか但御前の對決か。藤孝が一所懸命と駈出でかけ入り肺肝を碎き待つ所に。奥より出づる女の影ヤア傾城の大淀。左京様。藤孝様と尋ぬる聲。地藤孝是にと立寄りざま。左の太腹一太刀ぐつと刺すも扶るも一度の早業。うんとにつけに七轉八倒押へて上に乗るかゝり。汝故に幾人か殺されし人の苦み。地よい物が悪い物か此の劍に思ひ知れ。惡鬼毒蛇の變化にもあるまじ。人殺すを好みもせじ。三好入道に頼まれ謀叛の加擔人な。吐かせやつと

ひしぎ付くる。ア、藤孝様。お名を呼んで来るは。なう其の事を申さん爲。在京の武士御所中の侍。皆入道に一味して。時節を見て。義輝様を殺さんくと。様々怖い事ども。其のお氣もつかずうかくと。お命は。風吹く夜半の燈火。ア、あぶな。ア、あぶなと。危ぶむ私が。ッ心の。やる方なさ。藤孝様に知らせたいとは思へども。お側を離れお次の間へも出されず。いつそ私が惡人になり。愛想盡きて追出さるか。御意見申す人あらば。其の時萬事打明けんと女の果敢ない智恵だてにて。ひよつと一人殿様の御手に掛けさせ。につと笑うた其の時の。心の内の苦しみは。切らるゝ人の百倍とは。神ならで誰かッシ知るべきぞ。それでも諫むる人もなし。御扱は外様へ知れぬかと又殺させても沙汰はなし。地情なや蚊を殺し。蠅を殺すも罪科。況して同じ人間悲しや思はぬ殺生と。自ら浮かぬ顔色を。機嫌直しと又殺さるゝ。其の度々の人

の恨み積る因果の惡業。生きながら額に角

も生え。身に鱗も出來ずして今日迄君に思

はれしは。冥途で苦患見せんと佛の間か

情なや。賤しいさもし勤めの女。將軍

様に枕を並べ。地文武二道の藤孝様の御手

にかゝり。何の命が惜しからう。地私ゆ

ゑ死んだ人々の。恨みの念も晴るゝ爲弄り

殺しにして下さんせ。御臺様へ言譯し。御

憎しみをゆるしてたべ返すゝも殿の事。

くをとばかりにてフシ遂に。果敢なく息

絶えたり。思ふに違ひ神妙の女と袂絞つて

立つたる所に。御所中騒ぎ仕丁下部聲々に。

何かは知らず軍兵四千騎。色々の旗押立

て御所の四方に取圍み候と。いひも果てぬ

に追手の御門。貝鐘鳴らし関の聲フシ天地

も裂くるばかりなり。地案に違はず入道め

が年來の企て。君の御機嫌憚り手を延ばし

て後悔至極。一先づ御臺を片付け。入道め

と組まんずものと大音上げ。敵一味の侍

畜生はともあれ。中間馬取にても。御恩知

らば切つて出で駈散らし追散らせ。地命を

捨てよと下知をなしてぞ駈廻る。主君の命

に任せ冷泉造酒之進。御臺所の御手を引き

清瀧も刀ほつ込み。案内知つたる春日表小

門の方へと心ざし。足を早むる鞠懸の蔭。

父岩成主税之介槍提け。返せ遣らぬと追つ

かくる。清瀧かけ隔て。親子の好みは内

證。主従の忠義は世間。末代の恥辱が恥か

しい。相手になるが合點か。ヤア養ひ育て

し思知らず。地不孝の女郎受けて見よと。

突出す槍をはつしと撥ねてつと入り。岩

より堅き岩成が首宙に打落し。サア親もな

ければ我一身。主君と夫に任せし命。冥途

迄もとフシ咬き打連れ落ちてけり。地猶も近

付く関の聲。つるべて放す鐵砲矢叫び。御

東帶所の遺戸より長慶入道つと出で。帳

臺に向ひ御殿も響く大聲。地愚かなり義輝

殿。一子の首を切つて誠の心を見せ。色を

勤めて氣を奪ひ。五年以來仕込んだる謀計

武士といふ武士は我が味方。足利十三代の

榮華は夢の覺め口。目覺しに冷やりと切腹

切腹。地サア大將は籠中の鳥。八方より焼

討に。蟻の子迄も餘すな洩すな切入り責め

よと下知すれば。一味申して初戦通れ御用

に太刀長刀。拔きつれゝ六千餘騎面もふ

らず切つて入る。味方は僅か御小姓御茶道

下侍五十騎許り。中にも一騎當千の。藤孝

大鷹熊鷹の雄子を。驅くる勢ひに。遁れた

驅武者葉武者ども。追つつまくつつ入り亂

れてぞ三度戦うたり。フシ敵は多勢を。地

七手に分け火の手を上げて取圍めば。味方

は残らず討ちなされ強猛に逸る藤孝も。今

は是迄長慶がな來れかし。遁さじものと眼

を配つて立つたる所に。何時の間にかは松

永彈正。足利累代二つ引兩の御旗。郎等の

須股權平太に撥けさせ。其の身は御首太刀

に貫き大音揚げ。地大將軍源の義輝公を。

松永彈正久秀が討取つたり。地勝關上けよ

と呼ばはつて徐々と陣に入る所へ。左京の

大夫藤孝太白金鬼の怒りをなし。一文字に

取つて返し無二無三に打つてかゝる。そり

第三 旅の腹帯

の夏木立。江戸巖頭時つて山登え。谷巡り

や淺川よ藤孝よと主人が引けば郎黨も。我こそ先にと逃けて行く。返せ松永後を見するか彈正と。追詰めく追詰められて度を失ひ。逃げ迷ふ權平太が綿鬚擱んで。大地へどうとぶちつけ胴骨をしつかと踏まへ。持つたる御旗引つたくり差上げた其の勢ひ。あれ餘すなとどつと寄る。ヤアもののし手並は最前知つたらんと。當るを幸ひ人喰取つては投付け投散らし。板屋の篠野分の風。木の葉の飛ぶが如くにてフシあたり近付く敵もなし。地梁帝が龍を投げ項羽が山を抜く勢ひ。功名譽れも何かせん義輝公の尊骸に。首なや。果敢なや力なや。松を離れし藤孝が命は蟬の羽よりも軽く。惜しからねども存らへて主君の仇を討つ迄と。心の岩石鐵壁も碎けて涙はらはらく。澄るゝ玉が唐土の。珠玉を鑲め日の本に。たくみに匠が建並べし。御所も一時の雲霞煙に。紛れて落ちて行く。

フシ あらいたはしや。室町の。室に咲く花はや散りて。御臺所の御身さへこほれかゝれる當り月。清瀧が懐に。はやめ藥やあま物や。五更の天もフシあけぬ夜に。造酒之進が御供にてオクリ都を。忍び行く道の。ホラシ歩み苦しや足利の。フシそれとは見せぬ。とりなりも。餘の行く人にくらべてはかけふづ高き月の顔。雲井を餘所に天離る。フシオクリ御有。様ぞ。哀れなる。フシ昨日は御所の。物見より。望遠鏡にて見し目覺えの。東寺の塔は問ふ迄も。及ばぬ景の秋の山戀塚四つ塚跡に見て。いつか歸らん鳥羽殿。今ぞ小枝の。橋柱淀の。大橋。フシ小橋をも。朝日に連れてと渡れば波に五色の。玉散りて水に錦や。流るらん人目。づつみの。松並みて千歳の下は通れども。赤子産まぬ間は存らへて有るが。有るにも定めなき。女は生死のさかひ川。鳩の峰こし詠むれば。和光の影は。しんくくと。日も陽炎

諸木枝を連ねたり。取りわけ神の。御誓ひ。他の人よりも我が人を。護りもかたき石清水。今濁の世の源を再び歸りすみ馴れし。八重九重も遠ざかる。なごり施法の涙の玉。ひろへば道も撈取りて。橋本近き八つの鐘。盡きぬ歎きの澱りが。心わろけに御臺所。地行惱み草に平伏して御息も滌えく。に。夫婦驚き集ひ寄り様々勞り奉れば。折こそあらめ御産の氣づき。オクリやすく。うみの産聲は卵の中の頻伽鳥。姿は玉の男御子。歎きの中の悦びと。世の言草も是やらん。シテ地ア、扱果報拙き若が有様やな。御所を離れて道の邊の空に一重の覆ひなく。地に膝入るゝ宿りなし涙産湯に引かせんより。柴折りくぶる便なき。是が征夷大將軍左大臣義輝の。總領君の誕生に。あるべき事があさましやと溢るゝ。涙上々も。悔みは。女の習ひかや。ワキ調冷泉立寄りいとよ。往昔の例を引けば梓弓。正八

幡大菩薩筑紫に御生の折からも。石上樹下の吉例あり。地殊更所も男山擁護の眸程近し。御壽命は高良の神。武内宿禰が三百餘歳を奉り。御果報は御先祖尊氏公にあやかり給へ。地産屋は自然と天照す天に隔てのなき名將。土を踏まへし國土の主此の君ならで誰やらん。ヲ、目出たしと壽きて。二人御臺所の御手を取り。勇み行方も天の川。フシ思ふが中の船ならで。フシ標野川岸。曳船の。綱手にかゝる青柳の風にひらく。牧方を過ぎ佐太を越え。歌川を隔てて向ひを見れば。里の賤の女ナンテモく褌かけて洗足でからけて水にひつたり布洒す。細布さらしのフシ里を過ぎ。けさ出の旅のひと日だに。憂き事の數身に積り時を重ねてこれやこの。名にのみ聞きし大江の岸。渡邊の岸打過ぎて福島。にこそ三重へ辿り入る。地山の奥にも。フシ鹿ぞ鳴くならと。地市にまじはる佗隱者。冷泉造酒之進房平が父文次兵衛長房。小知に腰は折るまじと

水草清きわたのべや。福島に閑居を占め妻は渡世の塗桶に。丸綿ほんほりひたひ綿。色々ありと看板の綿を摘むには口傳も入らずオクリ手品。一つのひぢ綿や。引いて伸ばしてふはくくくと袂の下の富士の雪。フシ婦人の能こそ優しけれ。地造酒之進房平誕生の若君を。清瀧に抱かせ御臺所を介抱し。福島に尋ね着き内を窺ひ。則ち親父文次兵衛が宅。渡世の爲町人同然の體ながら武士氣は今に變らず。父母とも行儀つよき氣質。清瀧と我等密通の夫婦などといふ事と。耳へ入らば慥かに勘當。鼻息にも地出すまいぞと。嚙く後の細道より。萬事無心なり一釣竿。三公にも替へず此の江山と口ずさみ。釣竿擔け歸るは父長房。見向きもせずつと入る呼び返して申し。我等造酒之進。御勇健の體を拜し大悅至極と踞へば。ム、造酒之進な。今度京都の騷動此の邊とても靜かならず。我も鎧鎧提げ馳着け一働きと思ひしが。人も頼まぬ高名

だて。知行ほしけに無益の事と。流れに耳を洗ひ樂む所。地君の大變おことも嘆一方の御用に立ちつらんとこそ思ひしに。只今は何の用。眉目の好い京上臈をひけらかしに來たか。此の近邊は三好が領分。腰拔の片時も足を留むる所でなし。地早逃け去れといひ捨て入らんとす是々申し。我が身を遁るゝ爲に候はず。是は忝くも義輝公の御臺所。道にて若君御誕生といひも果てぬにヤレ聲高し。出來したく。先づ先づ是へと地招き入るれば。母も聞付け出で迎へ。御代が御代にて輿車の御成より。世の數ならぬ浪人を御頼み。名字の譽れと踞躍し。フシ上座に移し參らす。地御臺所も御涙。思ひもよらぬ飼犬に手を喰はれ給ふ御運の末。存らへ残るも口惜しながら。身二つになる迄と劔の山を遁れしも。造酒之進の働き頼むは親子夫婦ぞやと。啣ち給ふぞいたはしき。地文次兵衛謹んで。同人間の吉凶天地の運は絢へる繩の如く。只今危

難に迫り給ふといへども。正しき若君まし

ませば當家の御運は一陽の春を待つ。雪中

の梅に異らず。何條三好づれ一國に威を

振ふとも。天下に比ぶれば雀の角。鼠の牙

の災何事か候べき。地嬰兒ながらも義輝

公の若君。三好誅伐の御旗揚げ給ふとある

程ならば。五畿七道に持ち立つたる武功の

勇士。弓箭の名を揚げ祿を子孫に傳へんと

願ふ武士。御味方と申さんに面を振る者一

人もあるべきか。此の邸の隅にしつらひ

置きし學問所の萱屋。暫時が程の御安座所

案内申せ女房。燈火も細うして較越しに覗

かれなと。地義者の詞に心とけ。御臺所清

瀧も。オクリ誘ひへ奥に入り給ふ。地文次兵

衛造酒之進を近く寄せ。御臺若君は身が

請取る。そちは彼の海上太郎を尋ねて。

阿波淡路の軍勢を驅集むる一思案。然るべ

しといふ所に。地興さめたる氣色にて母立

出で。聞なうく聞けばあの清瀧といふは。

敵も敵三好が家老。岩成主税が娘なりとの

物語と。地聞くより父も驚く面色。聞いてや

くお氣遣ひない事。幼少より御臺所に仕

へ。女に稀なる忠節。親にも逆らひ岩成を

討つたる程。義を守り道を知つたる女と。

いへども猶眉を蹙め。左程道を知る女親に

不孝はよもあるまじ。地一度は主君に忠を

勵み又一度は。親の仇を報い志を遂げ孝の

道を立つる心と見た。さなくとも一門廣き

岩成。殊に此の邊三好が領分。縁引手引み

以て誑らば。流石女の誑られ。末方の大事

となる時は一生の不覺我が武士は廢る。危

ききをせざるは軍法の第一。不便ながら其

の清瀧。切つて仕舞へば寢覺やすく氣遣ひ

なし。地呼び出し挨拶する中造酒之進。一

刀に切つてのけい。それ女房賺して是へ同

道と。行燈押遣り座を組んだり。くわつと

氣上り顔は天火。調シテそれは只今か。間

取る程御臺所もお氣がたるむ只今々々。ハ

ッあんまりな御用心。忠節の味方一人失ふ

は後悔の基。此の女二心なきは我等請合と。

地いはんとせしが我が戀路。敏き父に悟ら

れじとッ包みて詞を控へける。聞いてや

若い者の知らぬ事。佐々木が藤戸の浦人を

殺せしも深き軍法。親子かくてあるからは。

生中女の味方一人などあつて益なく無うて

事缺けず。女房とも早う。地是へ呼び

出し口を問ひ。某が目交するを合圖に眞二

つに打ち放せ。刀の刃に覺えあるかぬかる

なく。あつくといへども一世の身の難

儀。心騒ぎ氣もどまくれ。調刀は業物研立

なれど。遂に女を試して見ず。萬一清瀧が

觀音の變化ならば。刀が折れはせまいかと。

地詞てんぐ上調子。エ、連に立つ母者人

も早合點と。奥を見遣れば清瀧が母に誘は

れ来る有様。有無三寶死に來る。エ、俄に

御臺の御用もがな。暫時の命も延ばはれか

しとッ違る潮遣る方なかりけり。地さあ

らぬ顔にて文次兵衛。調清瀧殿とやら。

御身は岩成主税娘とな。忠義といひ乍ら。

肉身分けし親。一門衆もさぞ懐しからんと。

娘心を引き見る其の中にも造酒之進は我が親の。目交が夫婦別れぞと。胸に迫るは涙と念佛。清瀧何の心もなく。調恥かしきお尋ね。私は元岩成が實子でなく。父母知れぬ捨子を。東寺の四塚にて拾ひ取りしと申ししが。地殺さんと迄致せし故。恨みこそあれゆめく慕ふ心はなく。所縁持たぬ果敢ない身頼みますと涙ぐむ。同イヤそれも岩成めが偽り。下心に何ぞ巧あつて。證據印もない捨子といひなし置きつらんと。念を入るれば。いやく嘘であるまい印には。様に縫付けありしとて私にくれ置きし。守本尊一寸八分の不動様。地包みし袱紗に書判するて年號月日。本の親の形兄と起臥肌をも放さず。則ち爰にと取出す。父母驚き押し開き。見れば見る程覚えあり。なうそもじを産んだは此の母。家重代の御本尊。此の判の筆者も是。眞實の父様。なうく再び娘悦んだこれ造酒。同其方の妹あれ兄ぢや。地苦勞しつらん可愛やと。夫婦引寄

せく歎けばうろく夢見し如く。造酒之進は猶仰天。本の父様母様が。なぜ捨て下さんしたと。父母に縋り付き恨み。泣くこそ道理なれ。同ヲ、尤々。赤子に何の憎しみあつて捨てはせぬ。おぬしが生れしは造酒が三つの年。地浪人のうき世路乳呑子二人の養育心に任せず。兄弟共に餓凍えさせんより。女は果報もある物と捨つる妹捨てぬ兄。可愛さ大切さ。何れ愚かッシある物ぞ。岩成が實子ならば造酒之進首討てと。たつた今合圖迄定めしに神佛の控へ綱。同やれく危い加減に子を拾ひ。子は命を捨うたな。地恨んでくれなと撫擦れば。扱は造酒様は。眞實血を分けし兄様かいの。ハア。地ハアツとより外詞なく。尻目に見やる目に涙。兄は顛倒五體に汗。結び初めたる因果の契り。悔んでも悲しんでも切れも離れも中々に。綱にかゝりし比翼の鳥のッシしがらむ縁ぞあさましき。地父母悦び。皆人らしい生立ち忠節盡す其の真加。

地親子兄弟廻り逢ふ御臺所も嘸御機嫌。先づ御前へと夫婦娘の手を引いて。同造酒之進は是にて四方に氣を付けよ。床の小銃に彈丸藥込んで置く。此の近邊は三好が百姓。欲に耽る人でなしの畜生ども。ごそとせかど。放さぬ鐵砲胸板に。オクリはたと受くるぞ不便なる。地造酒之進只一人我と我が身を見廻し。同エ、見事手足五體は人間と産み付けられ。征夷大將軍源の義輝公の御直の御詞にもかゝりし。冷泉造酒之進房平といふ侍が。地思はず兄弟夫婦となり四這ひに這ひ。尾の生えぬばかりの畜生界に落ちたるな。エ、成り果てたり口惜しし。口惜しと喰ひしばる。握る拳の爪際より。押り出す血に泣く涙。ッシ錦を解く如くなり。地よし御臺若君を父に渡し置く上は。心易し生而下けて存らへ。親一門を犬鶏の眷屬となさんより。我一人畜生になつて身を果し。氏家名は汚すまじ是迄なりと

刀押取り。阿ッアッ是は親の譲りの備前清光。畜生切れとて譲らぬ物と又脇差に手をかけ。是も主君より拜領の行平。此の大小脇ばさみ物の具固め。大事の御陣の眞先駈け。敵軍の大勢を掃り立て馳散らし。打合ひ。切合ひ。切結び。名ある敵を取つて押へ。首取れとてこそ拜領もせめ譲りもせしに。是はなくては畜生の腹を切る。二腰の銘の物末代武士の手に取らず。長く日本の廢り道具となさん事。よつく太刀刀の冥加にも盡きたりなア。首縛り舌を喰ふも思へば人間のなす業。畜生の自害手本なければ如何せん。扱あさましき因縁やと。獨言して咽び入り。身を掻きつめりフシ歎き伏す心の。中ぞいたはしき思ひに。たぎる清瀧が。地心を制し押へかね走り出では出でたれども。恥かしや抱きしめてあられぬざれのかの睦官の。俄に夢にもならばこそ今は兄様妹の。禮儀もあり指合を。苦しや側へも寄りにく。スエテわつとばかりに。

叫ぶ聲。兄も振上げ見かはせば衛士の焚く火は顔に燃え。身には消えつゝ玉の汗昨日の床に引きかへて。今日の逢瀬は背中どしフシ泣くより外の事はなし。フシ折もこそあれ。妻戀ふ猫の二正連れ。庇の屋根に呼び交し。フシ泣きこがれ。歌戀に牡丹の眠りも覺めて。軒の柱をおりつ。登りつ戯れ狂ひ。人目も恥ぢぬフシ聲々。地涙の眼に造酒之進屹度見遣り。同牝牡同じ毛色は彼奴も兄弟。飛鳥にあらざれば飛鳥の心を知らずとはそれは人間。畜類は其の氣を知る我を己が友とする。エ、無念や是非もなや。地見る目も憂たて鬱せしと吹き消す燈し。あの猫も兄弟かア、羨しい。兄妹夫婦と契りても。人も咎めず嘲られぬ。猫になりたひこちや猫ぢやといひつゝも。側へくと立寄るさし足。兄は還れんくとそろりくの盗み足。屋根には猫の妻戀に焦れ狂ひもつれ合ひ。軒の笈を踏み外し庭の古井へ二正つれ。たんぶと落ちたる水の音。なう悲し可愛や助けてや遣りたいと見れども水の底深く。暫時はあがき苦みてフシ遂には聲も絶果てたり。肝に應ゆる猫の自滅。刃に懸らず首縛らす舌をも喰はぬ是畜生の自害の手本。何存らへん今宵の命淵にもあれ池にもあれ。行きあたるを我が自害の場と。思ひすゑても妹が。離れじ退かじ造酒様と。聲で探すを外せば尋ね。四邊は暗闇戀の闇側にあるとも見す見えず知るべは足音行違ふ。袖の追風鬢の香をとめて。是ぞと取付くを引外して突倒し。走り出る門の口。私もなうと又取付くを振り放し。縋れば放れ寄れば退き。井堰にかゝるあら鶴繩纏れ。纏はれ三三へしどろなる。フシ道とも畦とも。地案内知らず横へ切れば先へ抜け走り過ぐれば追ひ續き。纏ひ繋かれ振りほぐされ野道田道の幾筋か。繩の纏るゝ如くにて根からむ草に蹴躓つき。思はず二人どうと据り始めて。フシ息をぞ繼ぎにける。地清瀧猶も泣きやます。

飼エ、むごい造酒様なせ俄に其の様に。疎
み隔てゝ下さんす。地畜生道に落ちしとて
私が科でなく尤お前の科でもなし。過去の
因果つく一人お果てなされしとて。夫婦と
契りし浮名は死に替りても削られず。兄の
一分立たねば妹は猶立たず。生きてゐるよな
らるゝ程に。一人存らへかうくせいと指
圖して下さんせ。恥かしい事のありたけ
打解け仕舞うた其の跡で。兄弟のさし合ひ
喰つたとて何の證もない事。地犬ともなれ
猫ともなれ來世迄も夫婦の中。死ぬるとい
ふ今になりさし合ひ所へ行く事かと。エ
エ抱き締めてこそ歎きけれ。コト、いへば
其の通り。無念や造酒之進狼狽へたり。一
人死なうが二人死なうが汚れし悪名雪ぐに
もあらず。如何にもく二人一所に死
んでくれん。爰はいづく。地やあの一村の
黒みこそ覚えあれ。天神の森宿所とは二十
町餘りも隔たる。是は夕草叢に星の映るは
池水。なう此方にも池水あり。地誠に願ふ

所畜生の自害水に行當る。天の導き深き淺
さを試んと。石を拾ひ打込み打込む濁り江
の。濁りも深き水の響きお身は其の池我は
是へと立別るゝを引き止め。コレまだ恨
めしい事ばかり。地手に手を取つて同じ水
底同じ水が飲みたいと。又泣き出せばヲ、
可愛や道理々々。我もさは思へども死切
り死骸も浮ぶ時。兄弟とも知らず夫婦とは
なりたれども。流石侍人間の道ならね恥
を知り。死を別々にしたりと父母へ申譯世
上の稱へ。地水に物は書かれぬど心の誠を
現せば。也水は我が書置ぞや。此の上着
は家の紋附お身が上着は御臺所召下しの拜
領。何れも畜生の死骸に捲くは其加なしと
は思はぬか。地ア、尤いざと帶を解けども
二世の契りは猶引きしめて。君とならびの
池にこそ身をも投げつと詠み置きし。古歌
の名所にあらねども是も夫婦が竝の池の。
岸の立木に打掛けく。サア西は斯うよと
指さす方の畑中。走來る松明後の方より小

提灯母の聲にて。爾それへ見ゆる松明は文
治殿か。おうくの聲々。地南無三寶死
損うては恥の恥ぞと押分けて。隠るゝ蘆の
ふしの間も待つ命こそ短かけれ。地提灯
片手に御臺の御手引いつ引かれつ三人一所
に走り寄り。間もなき中近邊に居ぬから
は最早尋ねまい。兄も妹も一器量ある者ど
も。思はず畜生の交りに名を穢し。恥かし
い口惜しいと思ひ詰め。家を出て生きては
居ぬ筈。御臺様にも若君抱きまし。恐れ多
いお氣扱ひ。お供して早歸れ。エ、惜しい
奴等残り多いと涙ぐむ。ア、氣の落つる事
いうて下さるなう短う思はずとも。地念
晴らしに京道を尋ねまいかいの。ム、それ
く死骸を見届け納めて其の後の覺悟。地
皆々此方へ行き過ぐる。提灯の光に映る
紅裏。是は何か爰にひらめくは。地なう
悲しや夫婦の衆清瀧が小袖が枝に掛つてあ
るわいの。地ヤア此の木の枝に掛りしは造
酒が小袖。地又二人が此の池へ身を投げ

しに疑ない。死なすにも濟む事を差詰まりし心故。可愛や果敢ない死をさせし。せめて體が浮み出で死顔なりとも見せてたもと。御臺諸共池を廻り廻り。水を叩き草に臥し聲も惜まぬ口説泣き。勿體なや父母に孝行こそは盡さすとも。子故の難儀憂へをかくる皆逆様と。不孝の罪を悔みの涙死おくれたか面恥と。猶身を隠す蘆邊より満ちくる。潮の如くなり。思ひ極めし文次兵衛さしあたる哀れに取亂し。涙に沈み居たりしが。池を覗いて大聲上げ。調エ、残念や半時遅かりし。ヤイ造酒之進假令武家に生れずとも。男たる者の死骸とならば腹を切るか。切先を食へ貰かるゝか。下郎とても吮を搔く其の法を知らぬ若者にはあらねども。地不便や泥水を飲んで身を果せし。最期の心を察するに。調思はす畜類の境涯に落ちし故。太刀刀の冥加を恐れ氏家名の恥を愼み。紋附の上着迄脱ぎ捨てし神妙さそれこそ人よ弓取よ。親は子に及

ばぬ者人と思ひ御臺所若君を預けて死んだか情なや。我が心の無念ゆゑあつたらしい侍を殺してのけた女房。なう可愛や娘も心器用者。恥かしいと思ひ詰め盛りの花を池の藻屑となし果てたと。夫婦手を取り泣き叫べば。御臺所も聲を上げ百人にも千人にも。稀なる忠義の侍男勝りの清瀧に。今別るゝ若君の生先御運のあさましやと。御身に迫る御涙蘆の蔭より一親の。歎きを歎くフシ兄妹が涙。間近き蘆垣の隔つる。中ぞ哀れなる。地文次兵衛涙を押へ。花に清香月に陰侍は氏素性。水底の魂魄も能く聞け御臺所も聞召せ。調元來造酒之進と清瀧とは胤腹各別。まんざらの他人なれば夫婦となるに障りなく不義にもあらず。某が爲には養子でも又拾子でもなく。親子となりし因縁疾く語り聞かせて叶はぬ事。地時を延ばし日を延ばし一大事を怠り。今後悔の憂へを見。浮世の泥に酔うたる文治兵衛は四足にも劣つて。調車の轡に彼の三升の水に濁るし。地小附雑魚とは我が身の上と。ステはらくと泣きければ。はつと驚く造酒之進。さては誠の親ならぬ親の高恩とフシ手を合せてぞ聞き居たる。調エ、かひなき今の昔語。彼が眞の父は周防の國の太守。大内義隆の家人我等とは古傍輩。しかも同年駒形一學兼綱といひし覺えの武士。母は造酒之進を産み落し七夜の内に相果て。それより間もなく是にある我等が今の此の女房。未だ十七歳子の養育とて呼び迎へ。後つれの妻と定まりし其の頃は内内の世盛り。地家中は基將茶茶の湯蹴鞠歌連歌。固より一學優男。花の本の門弟にて連歌を好み。同國朝倉の八幡宮月次の會の歸るさ。調時しも五月上旬の五月闇右は並木左は小川。降りしきる五月雨に奴が提灯打消し。目指すも知らぬ後より如何なる遺恨何者の業とも知らず。聲ををかけず切りつくる。流石手利の一學連歌の附句にや案じ入りけん。抜きも合せず敢なく只一討ちに

討たれて遂に此の世を去り。早二十二年の光陰。地思へば隙行くッッ駒なりし。地二十に足らで孤兒を抱へさまよふ女。傍輩の奸誼恐び難く。十五にならば親の敵を尋ね求め討たせてたべ。因テ、討たせんと契約にて。斯く夫婦となり國を立退き浪人し。地割なき中に清瀧を儲けしが。兄は生先大望ある大事の男子。此の乳房天の奥へと奥の中より水子の娘を捨て。實子に替へて育てしは約束違へず敵を討たせ。妻の本望一學が亡魂の



の餌にかゝつて。侍の本意を忘れ約束違へし。人の皮着た野狐の最期場は此の池水。是女房其方は人間なり。我が最期を見て前夫の敵を取つて本望遂けたりと勇み。御臺所若君に忠義饒ます。南都の叔父君を頼んで御運の到来を待つべしと。いひ捨て池へ飛び入るをなう狂亂か悲しやと。引止むれば蘆原戦ぎ。勿體なや暫し／＼と地押分け／＼走り出でたる兄妹。ヤア生きて居てくれたか出来した／＼誠の黄泉歸りぞと。母も御臺も縋りつき。フシ嬉し泣きこそ道理なれ。兄は草に平伏し頭も上げず泣き居しが。死損ひし面目なさ。出後れ致しお心惱まし歎きをかけ。重々の不孝申上けん詞もなし。調奴我等には父母四人あるよ由。承つて驚きしさりながら。七世の父母の思より今御兩所の御高思。塊に須彌山較べて比べ難けれども。御契約の筋を立つるも一つの孝行。地時を移さず討つて捨て實父の孝養。今の父母の本懐を達するは易いこ

と／＼。調母じや人申し尤敵今は名をも變へつらん。元の假名實名。若し住所知る、手掛りあらば。地よし虚説でも聞きたしと早雄の血氣盛り。そゝろに母は泣き出し愚かの事をいふ人や。名も在所も知る程ならば何しに二人の夫を重ね。うか／＼と手を延ばさうか。稚き其方の小腕に刀を持添へさせても此の母が。中々人は頼まねども。何のあてもない故文次殿へ苦勞をかけ。地二十餘年以來契約とはフシいひながら。孤兒の養育敵を聞き出す心遣ひ其の思は如何許り。今より其方成替り敵を討ち。親々の恩を報じてたも。二親さへあるものを又二親の孝行。調苦勞めさるゝいとしやとステ。又さめ／＼と泣きければ。女房泣くな悦べ。敵の住所本名隨に知れたぞ。ヤアそれは何處の何者。ヲ、胸形一學を討つたるは當國當所の住人。冷泉文次兵衛長房。ハア、ハツハツ地とばかりにて女房膝を立て直せば。御臺所は氣もきえ／＼。兄

は呆きるゝ妹はやはか親は計たせじと。兄が目色に目をつくる驚くばかり一つにて。四人四つの心々。フシ氣色。變つて見えにけり。地文次一人は色も變ぜず。調今に及んじ無用の詞數なれども。一學を討つたるは喧嘩でもなく。元の起りはあの女房。一家中に沙汰ある若盛りの艶色。我も二十三妻は無し。あはれ雁の翼もがなと。焦れてもいひ寄らん便りなく。幸ひ一學あの女房に知邊あり。調只管に頼んで文を認め懐中し。逢へば却つて一學が。調エ、我に本妻なきならば。彼の娘を娶らんものをと戀話。地此方は後手になり空しく歸るは幾度か。書捨ての玉章千束に積り。胸に思ひの満つる折しも。調一學が先妻産後に死し。忌の中より呼取り婚禮。無念にも妬ましく堪忍ならず。手もなく討つて思の儘に夫婦とはなりたれども。地思へば劍と刃を抱合せたる女夫合。それとも知らず我を頼みに馴れ馴染む／＼し。地の戀に百倍し

たる苦しみ。胸に包んで二十年來時かな
來れ。造酒之進に討たれて腰を散せん
と。待ち了せたる今月今日一生の懺悔是
迄。同サア討て造酒之進。ヤイ清瀧親の敵
通さぬなどと。造酒之進に指でもさば勸
當。先年棄てしも眞實は此の所存。サア討
たぬか造酒之進。地腰が抜けたか怯れたか
と迫られても。フシたゞ伏し沈み泣き居
たり。同ヤ我を討たずば汝武士は立つまい
が。如何にも討たれしも親討つたるも親。
地親の恩を辨へ知つて武士が立たずば立た
ぬ迄と。腰の廻りかなぐり抜き大小ぐわら
りと投出す。母立上り刀押取りするりと抜
いて聲をかけ。同夫の敵文次兵衛恨みの刀
請取れと。地飛びかゝつて眞甲耳の根迄す
んばと切付け。同サア敵討の儀は是迄。一
學殿とはたつた半年の馴染。なうお前とは
はや二十二年の馴染なれども。武士の娘
に生れた因果。地様々の御苦勞請け恩知
らず人でなしの此の女。犬畜生と思つて免

して下されと。わつと。フシ叫び伏轉び。あ
さましや憂たてや敵を討つて眞はん爲に身
を汚し。夫を重ねし其の敵は誰ぞ。枕を並
べ肌を觸れし後の夫。貞女の道を立てる
くと思ひしは皆道に背きしか。神に憎ま
れ佛に捨てられ。閻魔王に罪を問はるゝ
時。如何な富樓那の辯舌も。エテ何と言ひ
抜け遁れうぞ。畜生の身の果見置いて娘あ
やかると。切先喰へ眞逆池へだんぶと
飛び入つたり。人々はと泣き叫べばよろ
めきながら文次兵衛。同男を害し其の妻を
要る畜生殘害の此の體。地焼くな埋むな。
の。餌食になれと並びの池へどうと飛込む。
左手の腕造酒之進確と取り。同とてもなら
ばお腹めせ御介錯は私と。地引上ぐればく
わつと睨付け。同いはれぬ肝精。汝が世話
は御臺若君の御事ならで。日本に用はなし。
地兩人忠義を忘るゝなと水中にて腰刀。拔
くより早く我と我が腕の付根を切つて放
す。胸は水底陸に止めたる其のかひなき。

共に沈まん飛入らんと。慌てあこがれ裳を
浸す浮草隠れ。あれく父やう母様なう
と叫べば共に鳴く蛙。聲を力に抱上けく。
抱へ引上げ身を付け肌に暖めても。其のか
ひなみの春の池。フシ體は氷と冷え切つた
り。地猶抱寄せ撮寄せて今日目の三途の川。
共に瀬ぶみと歎けども忠義忘れぬ武士の。
遺言深き濁り江に涙汲み添へ立歸る。暫し
の敵も來世の女夫。暫しの兄弟此の世の女
夫名は永き世の女夫池。池の玉藻を亡魂の
形見に。茂る蘆真菰語り傳へて言の葉の寄
るべの。水とぞなりにける。

第 四

地背くとして雲にも乗らぬ物なれば。心ぞ縁
に引かれ行くよし足曳の太和の國。昔の京
と奈良の里興福寺の片邊に。身を墨染の
庵室あり。門設けたりといへども常に鎖
せり。垣は苔蒸し蔦がづら。朝は亂るゝ萩
の露。平等眞如の玉を磨き夕は。フシ戦ぐ
萩の風。怨憎會苦の夢を破り。地閑窓の。

月に囀けば。十萬の億地。掌の内に輝けり。

時しもあれ夏も過ぎ。オアシ木の葉の時雨

秋閑けて。道は絶えけり。山里に。且暮歸

經の聲ばかり。スエテ勿體なくも住人は。

武將義輝公の御弟義昭入道慶覺の。世を遁

れます御庵。ヲ殊勝にも亦いたはし。

斯くて浅川左京之天夫藤孝。御臺所に巡り

合ひ御誕生の若君を。清瀧夫婦に介抱させ。

海上太郎が案内にて庵の外に耳を澄し。

嬉しや御經の聲の聞ゆるは御他出にあらす

いざ。御案内申さんと。入らんとすれば

太郎暫しと押止め。某此の間申すには。

早く御還俗あつて三好入道を討ち滅し。家

名の恥辱を雪ぎ兄君の修羅の妄執暗らし給

へ。且は御先祖の孝行と繰返し歎きしかば。

とつくりと分別して返事せん。其の内参れ

との仰せ。還俗氣がつけば珍重先づ某一

人入り。返答よくば方々も直に御禮。惡し

くば重ねて願ひの奥の手。暫く爰にと枝折

戸開き。庵室の庭に頭を下け。海上太郎

兼盛参上とこそ訪れけれ。慶覺御經に餘

念なく見やるばかりに阿も掛けず。机に染

みたる御顔ばせ海上が氣は苛つ。御還俗

の否應御分別極まりしか。御返答とぞつか

うとなる。ムウ其の事に來りしな。出家の

身なれば兄の敵討たぬとて恥にもならず。

先祖の孝行後世弔ふより上もなし。分別す

る程還俗は思ひもよらず。重ねていふな聞

く事ない。歸れくと宣へば。海上きよつ

とし。見れば垣の外にも聞いて驚く顔の

色。堪へかねて海上太郎駈上り。御膝許に

ぐつと詰めかけ。我等が短氣かねて御存

じ。御返答を生死の境と一心を据ゑたる男。

實正嗣に違ひはないか。ハテいな事に念を

入る。出家侍二言はない。エ、其の根性と

は知らないでな。割つ口説いつ無用の口に

風引かせ。腸が燃え返る。家來でない暇取

つた。主でなければ恐れもないと。机押

取り泥坊めとてははつたと打ち。道知らず

義も知らぬづく入めとては丁と打つ。音に

驚き藤孝始め残らず庵に走入り。勿體なし

海上。物に狂ふか兼盛と引きとむればいや

く放せ。生けて置けば修羅の種。浦々

島々迄三好殿のお觸くと。足利數代の政

道をもどき。入道長慶が参内院参の。馬の

口取り奴め迄ひんくと跳ね廻り。いきり

廻る面を見れば其のたびく。にむつくと。

五臟六腑を捲り上げ。若君こそ御幼稚

なれ。興福寺の弟君に還俗勸め。二つ引。兩

の旗眞先に押立て。入道長慶が首取つて

今の無念を晴さんものと。日月にも佛神に

も肝膽碎き願ひをかけ。海上が頼み一つ。

酔の薬麴のと品付けて臆病第一のけづり

廻し。踏み殺しておれも死に度いと大聲。

上げて泣き沈む。藤孝涙ながら若君を抱

き取り。慶覺の前に据ゑ参らせ。是こそ

先君義輝公の遺子。日本廣しと申せども伯

父君甥君此の外に誰あらん。誰か守立て

後見し御代には出すべき。日夜内典外典に

眼を曝し。朝夕善惡忠孝不義を勘辨の御身

なれば。大凡俗の身を以て申し上ぐべき詞なし。所詮還俗の科によつて。無間焦熱阿鼻大地獄の苦みを受くと思召し。此の若君を後見し。御親兄の仇を討ち足利の家御相續。我々が望みを叶へ下さるゝも廣大の御功德。同サア御臺様。染々と御歎きなされと。地藤孝が。聲を力に顔振り上げ。夫に離れし鶯の恥しき世のうきねなれども。存らふも子の可愛さ。何事も頼み参らする。頼むゝの詞より、フシ外は涙にくれ給ふ。地清瀧夫婦さし寄つて。同コレ若君様。伯父様へござれゝの聲請共。地何れをそれと嬰兒の。教へられねど慶覺の。御顔を見てにつこりと笑ふ面ざし目鼻のかゝり。先君に生寫し。不便の者の有様や。かひなき今の對面やと。ステ包むに洩るゝ御涙。扱はと海上進み寄り。同甥は子伯父は親同然。流石御血筋なればこそ。胸襟な此方にぼやくと笑ひ顔。御目にはかゝらぬかいというはないか。いたゞしうは思

はすか。ま一度分別して下され。地あんまりむごいと撮口説けば。慶覺やゝ打點頭かせ給ひ。假令八逆十惡の無量の罪ともなればなれ。地若が風情御臺の有様方々が歎きといひ。いかでか餘所に見るべきぞ望みに任せ只今より。還俗せうとありければ。何御還俗とやなう有難や頼もしやと。皆一同に頭を下け。凋める花に置く露のフシ生きゝ勇むばかりなり。地慶覺重ねて如何に藤孝。同足利の家には先祖八幡殿石清水の神前にて。御元服の折から授かり給ひし小袖といふ。鎧兜を着し敵陣に向ふこと方方も存じの前。其の鎧兜持参せしか味方に加勢の武士は誰々。語れ聞かんと宣へば藤孝はつと赤面し。さん候御鎧兜は將軍御生害の折節。敵入道が焼討に灰燼となつて。土に埋もれしか但し三好が手へ奪ひ取りしか委細存ぜず。又御味方の軍勢は君御還俗あつて。義兵を上げ給ふと告ぐる程ならば。地足利重恩の國主城主夜を日に繼いで馳せ

参らんは案の内。御心易かれと申し上ぐれば慶覺くわつと御色變り。同足利重恩の二好さへ君を弑し。天下を奪ふ頼みなき世の中。慶覺還俗して招くとも加勢の付くは覺束なし。何を以て三好を討たん龜忽なり藤孝。地是非なや數度の軍功譽れを現はし。和歌は古今の傳授を得文武二道と呼ばれし達人。思慮淺くなり果つるも。足利の運命盡き果てしあさましや。佛神にも恨みなし口惜しの世の盛衰やと。怒りの御目に涙を浮め泣くゝ奥に入り給へば。始めの悦び忽ちに。萎れ入つたる有様は。オクリ目もあて。られぬフシ風情なり。地海上太郎大きにせき。同此の頃口手間入れさせ何の腔もない事。地差向ひにて聞き切らんとフシ奥をさして駈け入れば。地藤孝あつと感じ入り。天晴先君の御弟。龜忽を戒め臍を固する御氣質。傳へ聞く御先祖尊氏公。鎌倉御發向の餘風名將の弱し顯れしといふ所に。海上奥より走り出で。同なう御坊は庵

室に在まらず。裏の藪垣切り破つたるは臆病神に引かれ落失せられしに疑なしと。

地いへば人々又仰天驚かぬは藤孝一人。御い

やいや屈竟三昧に入る程の道念何の臆病。

我々に氣を勵まさん爲の出奔と覺えたり。

諸國の大名を驅り催し。多勢の着到を御

覽に入れば御還俗は必定。所詮御臺若君を

清瀨に預けはより三人三所に別れ。御分

は關東美濃路にかゝつて土岐齋藤を語ら

ひ。夫より駿州相州に北條氏康今川義元。

甲斐の國に武田信玄伊勢に國司北畠。尾張

に織田。彈正の忠信長を頼み。軍勢を催し

大和路より攻め上れ。造酒之進は北國路

越後の長尾謙信。會津に華名佐竹の一黨。

越前の朝宮が兵を進め近江の佐々木に手合

せて。若狭口七里半より切つて入れ。此

の藤孝は中國に至り毛利吉川小早川尼子晴

久陶入道。筑紫に少貳。菊地大友龍造寺諸

將を語らひ兵船を乗り連れ。南海西海の

んは案の内ぞと歌人は居ながら諸國の手配り。手筈を取つて御武運再び引き起すべき梓弓。家の名に負ふ足利の足を。早めて三重を捨て、も巡る世の中は。心の隔てフシなりけり。兄將軍は三吉野の梢の雪とフシ花散りて。御所も燒野とほの聞けば。せめては跡を記念にも都ゆかしく慶覺は。昔の跡を來て見れば爰ぞ御所の名残とて。燒残りし方もなく楚人の一炬に焦土となんぬ。咸陽宮の故事も身に染み渡る小夜嵐。草より草に吹き閉ぢて。朽ちぬ其の名を誰に誰見よとてや残すらん。紋を据ゑたる軒瓦碎けて元の土とのみ。焦るゝ色は秋の葉の。散りくになる御運の果。餘所にて聞きし口惜しさも今見る目には何ならで。人にいはれぬ思ひの數。包みかねたる涙の玉フシ袖と袖とに餘りけり。御やまだ暮れまじと思ふ日の暮れ過ぎたり。不覺の歎きに時移せしがあら笑止や。地何處に立ち寄り一宿せん所の人の來れかし。一夜の

宿の假臥と心を盡す折からに。二十に傾く月の顔。清らかなる若人のフシ用ありけにて行き過ぐる。是々なうと呼びとめ。行き暮れたる旅の僧。一宿の御芳志頼み入ると立寄れば。幸ひ我等此の邊にて人宿致す者なれども。三好殿より旅僧の御宿禁制と。地仰せ厳しき折なれば痛はしながら叶ふまじ。是より少し彼方に足利の將軍。義輝公の住居なされし古御所の御座候。誰咎むる者もなければ彼處に一宿なされまいか。なう其の御所は三好入道長慶が爲に燒滅され。此の礎こそ御所の跡外にありとは誠にからず。不思議なりと咎むれば。今にあるか燒失せしか御覽あるより證據もなし。御道知るべ申すべしいざ此方へと夕露の。舊の宿は憂れたくとも袖片敷きて御泊りあれ。なう御僧と御所の方へぞ三重へ入りける。フシ斯くて慶覺。地所の人の案内にて。御所の御門を立ち入れれば昔の憂其の儘に。義輝御生害の折からに三好が兵火に

焼けしとは。誰が偽りと白露の。宿りとな
る。フシこそ果敢なけれ。地棟門唐門堀中門。

九十五間の遠侍。大書院の障子押開けば。

釣殿記録所渡殿唐木。作りの千疊敷。オクリ

紫檀の。長押花欄の椽。伽羅木の床框。廣

東沈の連櫓。積れる座に。フシ埋もれたり。

地是より奥は同じ館の内ながら。御將軍の

思ひ人女の住みし部屋々々とて。假にも入

りたる事なけれど其の名ばかりは聞き及

ぶ。梅枝が鳴渡の間。初雪が通天の紅葉の

間。南表に白菊が住みし局は残れども。地

主は無残の刃に死し連理の枕比翼の床。片

敷く人も諸共になき世の中の習ひとは。思

ひ知れども今更に。止らで落つる涙の玉ッ

シ念珠の數を添へながら。御殿々々を行き

めぐる高殿。圓やこそ先君平日の御座の

間よ。地戀しの昔なつかしやと。さつと障

子を明け給へばこは如何に。小袖と名付け

し緋絨の鎧兜。上段に立てられたり。ナウ

是をこそ尋ね求めしぞや。敵の手にも渡ら

ず爰にある事。足利の家起るべき瑞相と。

悦び鎧に手を掛くれば。コハリ俄に家鳴り雲

暗く立木も草も動搖し。うんと一聲悶絶し。

地さしもの慶覺階を眞逆様にころくく。

フシ頃も二月。梅薫る御所の世盛り花盛り。

彩の如くに顯れしは夢か。現か。三重

千疊敷其の世話

庭には金銀の砂を敷き。四方の門邊の玉

の戸を。出入る人迄も。光りを飾る粧ひは。

誠や名に聞きし。寂光の都喜見城の。樂

みも斯くやと思ふばかりの景色かな。平家

西に。三十餘間に黄金の襖立てさせて。波

に夕日を映されたり。東は三十餘間に。白

銀の襖立てさせて。通天の紅葉かゝれしは。

長生殿の内に秋更けず。不老門の前には。

日も傾かず上もなき。富士に勝りし。ナホス

色の山情の。谷の戸を出でて。鶯宿す梅が

枝。二人籠の白菊露ながら。手折ればまがふ

袖の初雪。タ、キ夜毎に召され朝毎の。君が

枕に寢亂れし。其の黒髪の移り香も。何故

我に秋の扇と。フシ捨てられて。恨みは世を

も人をも思ひ思はじ。只其の一人の大淀よ

どの淀の。冷泉川瀬の。水車。汲んだる水は

盡くるとも。今の涙はよも盡きじ。フシあ

れなう又御座の二人寝。覗いて恨みを晴ら

さんと障子の蔭よりさし覗けば。シテ地我も

共に立ち寄りて目に煩惱の苦を見する。

二人君は重なる盃の紅深き膝枕其の面。フシ

影も腹立ちや。シテ枕に響く其の鼓。打て

や鳴らせや。打てや鼓の。フシ聲に紛れて身

を忍ぶ。ツレフシ障子開けて。紅梅の天も花

に酔へりや。庭も花に酔うたり酒は憂ひの

玉簪。千金春宵一刻飲み。シテ御酒の機嫌

も義輝公。お手に鼓の現か夢の駢は大淀の。

松の響か琴にも似たる膝枕。つめりこそぐ

りせり思さればや。笑ひ。ハ、ハ、ハ、ハ、

同とろく寝る間によい夢を見た。二人寝

よとて起された。ツレ誰様と。シテおれ様

と。二人フシ折れや手折れや。庭の梅。目ざ

まし草と指をさす。フシ梅が枝の。シテ圓香ひ

に移るあだ心。菊の下
 葉に置く露の。其の玉
 葛それよりも。九條の
 君の根引の花は飽かぬ
 よなう。二人面白の花の
 廊や世界の色の上盛。
 出口には柳招いて入り
 来る客の揚屋の騒ぎに
 しろいお客はちりん。
 西の洞院中の道寺ぞめ
 かばぞめけ。上の下の
 町中の町の家並可愛ご
 かしに。粋が身を食ふ
 根引身請は金が巾す
 る。口説諸傳は暫間請
 込む年増の娼婦は。紋
 日に追はるゝ禿は遺手
 を怖がる。實に誠中戸
 小宿でちよつきりちよ
 つと間夫を切らるゝ乗



換への。女郎の恨の夜
 夜を重ねて付廻した
 る。フシ恐ろし。シテ地
 猶妄執^{まがしよ}の沸返るあつい
 燭より飲むなら酒の。
 ひやつひやいい。ツレ
 コハリ日頃恨みの菊雪亂
 れて梅飛びかゝり。取
 りつき抱きつき君に縋
 れば。シテ何^{なん}ぢやの見
 られぬ。ツレ後妻^{おなづ}打つ
 たる此の鐵杖^{てつちやう}は。シテ煙
 煙管のらう。ひら
 らう。らう。らう。らう。
 らとらとらとら。らとら
 ら。ツレ煙草の。シテ
 ひやとりとるるるる
 ろ。とるるるるる。
 地てる。~~~~~養
 輝公。あら正體も波



の鼓の調も解けて。一筋ならぬ二筋三筋。四筋につれて此方に靡けば。ツレ彼方の恨み。シテ是を慕へば。ツレ彼處の妬み。色と酒との醉心地^{フシ魂}。くれて茫然たり。シテ思ひ出でたり其の昔。唐の帝の三千宮蝶の宿のさめ言。それを移していざ爰に花の香慕ふ蝶々の。とまりし袖こそ我が妻よ。ツレ地おう／＼お手に。手に／＼手折り折り取る花の枝。二人宿りの蝶の立つや霞にひら／＼／＼。ふるは。羽色か櫻か雪か。こがれ羽思ひ羽ふうは／＼。露もこほれてゑい／＼／＼。蝶々とまれ。此の枝にとまれふりはへ。かざしフシ揚羽の蝶。地羽を休むる大淀の。袖に、寝よとの印は是。此の。比翼の蝶々。てうど抱合ひ閨に打連れ入る姿。あれを見よ。コハリ憎し妬まし此の念力の床の海。八苦の波と立ち隔つて寝るとも寝させじ。添ふとも添はせじ。怒りに身を焼く身を焦す。紅梅則ち無間の炎。ナホスばつと燃立つ三筋の煙姿跡なし。

三 三 歌 此方は今から殿様やめて。内の囁衆のだてこき／＼に。葛籠ありたけ打着せ着せて。連れて歩行けば足かる／＼や。跡へ下れば。跡から招く。フシほういはい。シテ先に立たせてなうよい女房うまい腰付き幅廣帯で。因果め。ツレ詞ヲ、いや。二人浮かれ浴衣の。フシ菊の露。ツレ籬々に香ひこほれて亂れ咲き。シテ老いせぬや。／＼藥の名をも菊の酒。歌おれと。そなたは實生の菊よ。中の色香はドツコイ。人知らぬサウモセイ。そなた待つとて。胡麻殻焚いた。菊の下葉もドツコイ。折り添へて悔しや水を。フシ揃ふまじもの。フシ花にも戀の仇敵。ませも羅も踏みしだく。コハリ大地俄に震動して。渦巻き上る猛火の影。名のらで知れやナホス白菊が。フシ其途の姿現れたり。シテ悲しむべき身にもあらざるに。如何にや汝いつ扱恨み。フシそめけるぞや。早黄泉に立ち歸れと。蚊屋に隠るゝ夏引の絲に繋ぎし玉の緒の。消えもやせんと身を冷す。ツレ二世とかねたる妹背の語らひあだには誰かなす業ぞや。非道の劔に此の身をさかれし其の苦み二人身を切る縁きる其の恨み。退かじ放れじつき廻つてエイ／＼／＼。ゑいくる／＼。エイくる／＼。くるり／＼。未來永々憂目を見せん思ひ知れ。天に登れば天津風地に又沈まば土風山風。野風木枯さ。さつ／＼さつたるはやちの風に。ツレ吹き立てられて覆いて上る上段の。障子に映る阿責の相。無明の業火黒煙。ふすほり渡つて其の身を焼く。床は精細欄は鐵城驕慢の。又にかけて五體五つに切斷す。オクリ娑婆の。報いをフシ今爰に。あら堪へがたやといふ聲ばかり。残るは御松の風。姿果敢なく秋暮れて冬も日數をふる雪に。庭も梢も埋もれて皆白妙の。夕景色。二人歌君と淀とが。相合傘の袖と袖。煙草戀草伽となる。煙吹きまぜ。ちら／＼と。頭に雪の。置頭巾。歌聲様々々寒そに／＼に

火桶やりたや炭添へて。サンヤレ〜。い

〜追ひめぐる。地義輝御聲苦しげに。同如

慶覺足の踏所も忘れ悦び勇み取上ぐる。二人

つそ二人が。フシ雪ならば。フシ地降り重なりて氷付き。離れまいぞやいつ迄も。シテ

何に大淀。汝が色に我を惑はし我又汝を苦しむる。地苦患いつかは通れんと。叫び給

鍔の袖や墨染の袖にかゝるはフシ名残の涙。頼生菩提の回向の威徳鍔の威徳。ツレ三好

爰は吳山にあらねども傘の雪の重さよ。いで傘の雪を拂はん傾く傘の動かばこそ。す

へば鬼女は答を振上け〜。煩惱業火の婆娑の妄執思ひ知らずや腹立ちやと。フシ聲

を亡し恥辱を雪ぐ聲も我も。天にも上る心地にて立ち出づる千疊敷。夜かと思へばシ

は〜重るぞ重たや重し。大磐石の碎け亂れて飛ぶ雪の。ツレ中に執念き初雪が。中

目を感じまし見れば夢とも面影は。爰にあり〜阿責の現相。若人欲了知三世一切佛。應觀法界性一切唯一心と破地獄の秘文を

ナフシ四季折々の。地榮華の御所の上藤達も宮殿樓閣皆消え〜と。三重〜シテ失せ果

恨みぞ積る八寒の雪に身を埋み。大紅連の水に閉ぢられ苦しみ受くるも誰ゆるぞと。

唱へ。袈裟押取つて投げ付け給へば。佛力不可量不可思議の御法の聲を聞く時は。惡鬼心を和らけ忍辱慈悲の姿にて。佛土に至る嬉しやと形は消え〜消ゆると見え

て。地ありつる礎の枕の上に。眠りの夢は覺めにけり。時に虚空を閃めきて四人の女の四つの魂。淺川海上造酒之進。御臺所を誘ひ導き利那が間に馳せ集る。フシ幽鬼の仕業ぞ不思議なる。ツレ慶覺夢の御物語此

て。姿はフシ消え失せけり。シテあら〜コハリ面色變じて茜さす。憤怒の顔容。共に

し。青黄赤白四色の玉。オクリ虚空に〜飛び去り失せてけり。シテ地なう懐かし法の人。宿の主と見えしも兄義輝ぞや。御身必ず還俗して若を守立て三好を討ち亡し修羅の苦患を助けてたべ。煙の中に残りし足利重代小袖の鍔星兜。是を渡さんとばかりに。ありつる姿緋緋の鍔とフシ變じ給ひける。地

ふ。門を引きかへて文武の。門にぞ入り給

來れといふ奈落の底に連れ行かん。ナホス行くも。逃ぐるも。迷ひに迷ふ衆の内。瞬

の角の枝高き梅が枝爰にと梅花のほむら。コハリ二人。此方に向へば又白菊が。眼の

光りは電光雷火の落ち来る如く邪淫飲酒修羅道の。ナトス三つの車のくるり〜と三重

火桶やりたや炭添へて。サンヤレ〜。い

〜追ひめぐる。地義輝御聲苦しげに。同如

慶覺足の踏所も忘れ悦び勇み取上ぐる。二人

つそ二人が。フシ雪ならば。フシ地降り重なりて氷付き。離れまいぞやいつ迄も。シテ

何に大淀。汝が色に我を惑はし我又汝を苦しむる。地苦患いつかは通れんと。叫び給

鍔の袖や墨染の袖にかゝるはフシ名残の涙。頼生菩提の回向の威徳鍔の威徳。ツレ三好

爰は吳山にあらねども傘の雪の重さよ。いで傘の雪を拂はん傾く傘の動かばこそ。す

へば鬼女は答を振上け〜。煩惱業火の婆娑の妄執思ひ知らずや腹立ちやと。フシ聲

を亡し恥辱を雪ぐ聲も我も。天にも上る心地にて立ち出づる千疊敷。夜かと思へばシ

は〜重るぞ重たや重し。大磐石の碎け亂れて飛ぶ雪の。ツレ中に執念き初雪が。中

目を感じまし見れば夢とも面影は。爰にあり〜阿責の現相。若人欲了知三世一切佛。應觀法界性一切唯一心と破地獄の秘文を

ナフシ四季折々の。地榮華の御所の上藤達も宮殿樓閣皆消え〜と。三重〜シテ失せ果

恨みぞ積る八寒の雪に身を埋み。大紅連の水に閉ぢられ苦しみ受くるも誰ゆるぞと。

唱へ。袈裟押取つて投げ付け給へば。佛力不可量不可思議の御法の聲を聞く時は。惡鬼心を和らけ忍辱慈悲の姿にて。佛土に至る嬉しやと形は消え〜消ゆると見え

て。地ありつる礎の枕の上に。眠りの夢は覺めにけり。時に虚空を閃めきて四人の女の四つの魂。淺川海上造酒之進。御臺所を誘ひ導き利那が間に馳せ集る。フシ幽鬼の仕業ぞ不思議なる。ツレ慶覺夢の御物語此

て。姿はフシ消え失せけり。シテあら〜コハリ面色變じて茜さす。憤怒の顔容。共に

し。青黄赤白四色の玉。オクリ虚空に〜飛び去り失せてけり。シテ地なう懐かし法の人。宿の主と見えしも兄義輝ぞや。御身必ず還俗して若を守立て三好を討ち亡し修羅の苦患を助けてたべ。煙の中に残りし足利重代小袖の鍔星兜。是を渡さんとばかりに。ありつる姿緋緋の鍔とフシ變じ給ひける。地

ふ。門を引きかへて文武の。門にぞ入り給

來れといふ奈落の底に連れ行かん。ナホス行くも。逃ぐるも。迷ひに迷ふ衆の内。瞬

の角の枝高き梅が枝爰にと梅花のほむら。コハリ二人。此方に向へば又白菊が。眼の

光りは電光雷火の落ち来る如く邪淫飲酒修羅道の。ナトス三つの車のくるり〜と三重

火桶やりたや炭添へて。サンヤレ〜。い

〜追ひめぐる。地義輝御聲苦しげに。同如

慶覺足の踏所も忘れ悦び勇み取上ぐる。二人

つそ二人が。フシ雪ならば。フシ地降り重なりて氷付き。離れまいぞやいつ迄も。シテ

何に大淀。汝が色に我を惑はし我又汝を苦しむる。地苦患いつかは通れんと。叫び給

鍔の袖や墨染の袖にかゝるはフシ名残の涙。頼生菩提の回向の威徳鍔の威徳。ツレ三好

爰は吳山にあらねども傘の雪の重さよ。いで傘の雪を拂はん傾く傘の動かばこそ。す

へば鬼女は答を振上け〜。煩惱業火の婆娑の妄執思ひ知らずや腹立ちやと。フシ聲

を亡し恥辱を雪ぐ聲も我も。天にも上る心地にて立ち出づる千疊敷。夜かと思へばシ

は〜重るぞ重たや重し。大磐石の碎け亂れて飛ぶ雪の。ツレ中に執念き初雪が。中

目を感じまし見れば夢とも面影は。爰にあり〜阿責の現相。若人欲了知三世一切佛。應觀法界性一切唯一心と破地獄の秘文を

ナフシ四季折々の。地榮華の御所の上藤達も宮殿樓閣皆消え〜と。三重〜シテ失せ果

恨みぞ積る八寒の雪に身を埋み。大紅連の水に閉ぢられ苦しみ受くるも誰ゆるぞと。

唱へ。袈裟押取つて投げ付け給へば。佛力不可量不可思議の御法の聲を聞く時は。惡鬼心を和らけ忍辱慈悲の姿にて。佛土に至る嬉しやと形は消え〜消ゆると見え

て。地ありつる礎の枕の上に。眠りの夢は覺めにけり。時に虚空を閃めきて四人の女の四つの魂。淺川海上造酒之進。御臺所を誘ひ導き利那が間に馳せ集る。フシ幽鬼の仕業ぞ不思議なる。ツレ慶覺夢の御物語此

第五

齊の蘇秦がちうどくの仇計らざるに天是を尉すとかや。三好修理之太夫入道長慶。

一旦の逆意運に乘じ。足利家を追崩し。朝

日の岡に館を構へ。南表に大堀掘つて。石

壁高く河水を湛へ。數十人の警固時を分つ

て油断なく。北は千本の松茂り。岩倉山朗

詠が谷に續き。獸も駈けるに便りなき。

要害頼みに日夜の酒宴。フシ世を我が儘にぞ

振舞ひける。地頃は永祿十二年仲夏下旬足

利義昭公。先君の仇を討つて俱不戴天の恥

辱を雪がんものと。浅川左京之太夫藤孝。

海上太郎兼盛。冷泉造酒之進岩倉山を夜に

入つて。三好が館に忍び着き。塀に梯子か

け渡し。進み入らんと氣を焦いたり。後陣

に續きし。コハリ諸國の加勢。近江に佐々木

六角判官。京極高成浅井長政。美濃に大館

沼田の平次。伊勢に秋家。伊賀に金森一色

藤丸。越後に上杉長尾の一族。越前に朝倉

日下部義景。桃井小山宇都宮甲斐に武田の

旗大將。高坂彈正原隼人。山本勘介道鬼入

道。尾張に織田の股肱の臣。羽柴筑前守秀

吉。相模に根越。五十嵐六浦駿河に氏康。

信濃源氏武藏の七黨八平氏自身に馬を乗り

進め。持槍小旗高提灯。塀の外面に隙間な

く。フシ舎の子。打つて扣へたり。地其の隙

に浅川海上造酒之進。難なく塀を乗越えて

屋根の上に突立ち。中にも藤孝大音上げ。

圓なう御加勢の御中へ物申さん。御芳志に

よつて是迄忍び寄つたり。思へば遺恨深き

長慶。萬一各に討たせては年來の失望。徒

らに君恩を報ずる所なし。我々が手につか

申す内。暫く御勢を麓に屯し下されかし。

事難儀に及ば。笛を吹いて知らせ申さん。

それを合圖に駈着け。重ねての御加勢頼み

入る。表門には主人義昭。中國西國の勢を

以て寄せらるゝ契約。地時こそ移れと呼は

はれば。皆尤といふ聲して。先手より勢を

まきほぐし。フシ山下にこそは控へける。

さらでも氣早き海上太夫。圓なう案じたと

は事變り。忍び入るも易かりしで入道が

寢間へ踏込み。地首引抜いて参らんと躍り

出づるを藤孝押へ。圓ア不覺なり兼盛。思

慮深き長慶如何なる事が巧み置き。地隠れ

逃げんも測りがたし。圓物靜かに館の内を

検分し。駈くるも引くも三人一所。地せく

なくと制する内。夜廻りの中間打連れ拍

子木打つて來りける。是こそ天の與へよと。

ひらりと屋根を飛ぶより早く。すつばと切

つて抜討ちにはつたくと切倒し。直

ぐに拍子木かちくく。御用心と呼はは

つて。フシ館の内へ忍び入る。圓暫く奥も靜

かなりしが。すはや夜討と松永彈正。圓表

門には別儀なし。裏門より入りつらん。敵

は姿を隠れんと提灯持つまじ。味方は残ら

ず用意の腰提灯。印を合せ松原へ誘き出せ。

一人功名同士討すな。力を合せ討つて取れ

と。地聲の下より三好が勢。皆一樣的提

灯に。紛るゝ方なく。浅川海上造酒之進名

乗りかけく。松原に木立を取り。獅子奮

迅虎亂入。飛鳥の翔の手を碎き。南無阿彌陀佛の拜討ち。何時の因果が今日の日に巡りあつたる車切。五十の命袈裟切に。野邊の草葉の露霜と。大刀風撫で切り拂ひ切り。刀は業物手は利いつ。はらりと三重へ切りつくし。提灯奪取り三人が。腰に隆かと奥をさし。フシ重ねて切込む其の跡へ。命から長慶入道。なう悲しや表門も早打破り。大勢切り込む何とせう。何處に此の身を隠さうぞと。吐き出でて。せめて命も助かるかと。千歳の松の木に。傳ひ登るも老人の。手足わなわな身もふるひ。踏む踏外しオタリはふ。梢に隠れる。三人が手にかけて切殺せしは百人餘り。されども入道松永が在所も知れず首も見ず。大きに焦いて館の内。探す一間に松永彈正。踊出づるを造酒之進。サア松永は我に任せ。方々は入道が在所探し給へと。地呼ばりく受けつ。流しつ渡り合ひ。火水になれと戦うたり。松永元より手練の勇士。踏込んで打つ太刀を。冷泉開いて受け外し。左の肩口三寸ばかり切りさかれても事とせず。沈んで拂ふ切先に。松永が太勢半分あまり切り込ん

で。深ふ所をつつと入り首宙に打落し。彈正久秀を。造酒之進が切り止めしと。はる所へ義昭公。藤孝兼盛諸國の加勢。高提灯を點し連れ。松原に大息つき御大將怒りの大音。館の内に一寸も探し残せし所はなし。入道に羽が生え虚空を飛んで出でんは知らず。何處にか隠るべき。今日討ち漏らして入道に再び逢ふは測り難し。矢の冥加に盡きたるか。エ、口惜や腹立やと。萎れぬ御目にはら涙。藤孝も途方にくれ其の外並居る人々も。果て、ぞ立ちたりける。海上太郎劫くさらかし居たりしが。思ひ付いたそれよく。此の松の木が心もとなし。てつきり梢に隠れて居をらう。一本づつ片端に引抜いて詮議せうかいや。抜くも手間どはなり。火を付けて焼立てう。道梢に居るも居られず。枝より枝に傳ふ拍子。松の小枝に差添への。鐔引つけて身は稍ばなれ。大地にどうと落ちてけり。人にこそあれ提灯寄せよと。手に長柄の鎌押取り。穂先を揃へてぐつくと。芋刺串刺め

つた突き。主君を殺せし天爵は我と我が身に木の空で。燭ちはためき真逆様。落つる所を義昭公。陳かさず首討落し御敵亡びて悦びの。勝関あぐる名をあぐる。中頃絶えたる足利の。家踏み起す掘り起す。萬の寶に秋津國上下の活計歡樂も盡きせぬ。御代こそ久しけれ。

七行大字直之正本とあざむく類板世にありと雖も又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚だすくならず三寫鳥馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直の正本にあらず故に今此の本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫りて直の正本のしるしを亂せよとの求めに隨ひ予が印判を加ふる所左の如し。

竹本 筑後 掾

本 竹
教 博

正本屋 山本 九兵衛版（舊印）
大阪高麗橋堂丁目

山本 九右衛門版